

歯学部ニュース

令和6年度第1号（通算145号）

特集 入学を祝して
歯学部生の活動
歯学部の今

目次

特集1 入学を祝して	1
新潟大学歯学部長 井上 誠 医歯学総合病院副病院長（歯科総括） 多部田康一	
入学者のことば	4
川上慎太郎・佐藤 楓華・神林 美羽・福地 憲太・瀧川ほのか・五十嵐美水・鈴木 志歩	
特集2 歯学部生の活動	9
歯学部生の今	
若林 美樹・佐原 蓮・藤田 能亜・宗田菜穂子・神林 ゆい・和久田大介・竹内 蒼 宮田 優奈・高井 勇典・村上 令奈・中川 珠優・上田 実怜・小平 幸乃	
留学生紹介	22
Muhammad Fadhli Putranto・Stephanny Castillo	
課外活動紹介	25
地域で活躍する歯科医師の姿を見学して	
高津 彰史・栗田 大地	
部活動紹介	28
バスケットボール部 矢田部貞子・歯学部軽音楽部 小林 丈晃	
研修医プログラムを修了して	30
プログラムB臨床研修歯科医 原 拓未	
大学院へ行こう	31
安野 綾夏・安藤 大樹・板 離子	
博士論文名のリスト	34
特集3 歯学部の今	37
歯学生臨床実習開始前共用試験の公的化	
濃野 要	
総務委員会だより	38
井上 誠	
診療室・分野紹介	41
予防歯科学分野 教授 小川 祐司 顎顔面口腔外科学分野 教授 富原 圭	
教授に就任して	44
堀 一浩・吉羽 永子	
素顔拝見	46
市川 佳弥・星野 剛志・木口 哲郎	
学会受賞等報告	49
井上 誠・大川加奈子・諏訪間加奈・Quang Van Guyen・小野 喜樹・小林 水輝・小川友里奈 今井 有蔵・氏田 倫章・金丸 博子・高橋 直紀・野中由香莉・中島麻由佳・滝澤 史雄 野村みずき・小出 耀・黒川 亮	
研究統括機構研究准教授付与	
市木 貴子	
論文紹介	67
都野 隆博	
新潟歯学会報告	69
竹原 祥子	
同窓会だより	70
加藤 幸生	
教職員異動	73
歯学部各種委員会	78
ミニコラム	79
歯学部を支える方々 渡部 康雄・杉江あきの	
編集後記	81





入学を祝して

新潟大学歯学部長 井上 誠

新潟大学歯学部歯学科、口腔生命福祉学科の新入生の皆さん、保護者ならびにご家族の皆様、ご入学、誠にありがとうございます。編入生を含む歯学科45名、口腔生命福祉学科24名の皆さんを新潟大学教職員一同、心から歓迎します。皆さんの前には、将来の歯科医療人、福祉専門職としての輝かしい道が開かれています。

新潟大学歯学部（歯学科）は昭和40年に東京医科大学歯科大学と大阪大学に次ぎ、日本海側初の国立大学歯学部として東北大学、広島大学とともに設置されました。さらに、超高齢社会の到来にあわせて、平成16年には日本で初めて保健・医療・福祉を統合的に思考できる専門家（歯科衛生士・社会福祉士）を養成する口腔生命福祉学科が設置されました。来年には歯学部設置60周年を迎える中で、歯科医師数が不足していた昭和40年代から、歯科医師過剰と呼ばれ、さらに超高齢社会の中で高齢者の口腔の健康の維持が求められるようになった今日に至るまで、歯学部や福祉を取り巻く社会の状況や教育環境も大きく変わってきています。

新潟大学歯学部の教育目標は「包括的医療を行うことのできる有能かつ感性豊かな歯科医師の育成、歯科医学発展のために指導的な人材および保健・医療・福祉に貢献する専門職業人の育成」であり、「学生自身が自ら学ぶ」ということを教育の柱としています。その中核をなすのが、Problem-based learning（PBL）という学習方法であり、診療参加型臨床実習です。PBLでは「学習の主体は学生である」という概念のもとに自らが疑問をもち、自らの手で学ぶこと（アク

ティブラーニング）を教育の主体としています。そこでは「学習者」を「学修者」と呼び、知識を習う「学習」ではなく、学んだ知識や技術を身につける「学修」を行うことで、単なる知識や技術の獲得だけでなく、人間関係を構築する力や、自己管理、自己理解、課題対応力など汎用的な能力の向上と育成を促進するのです。さらに、新潟大学歯学部歯学科で行われている「診療参加型臨床実習」では、インストラクタの指導の下で、学生自らが検査、診断、治療を行う機会をもちます。令和6年1月の歯科医師法の改正により、法律に基づいて歯学生が臨床実習において歯科医師の指導監督の下、歯科医業を行うことができることになりました。法律が変わったことで、臨床実習に進む歯学科の皆さんは、Student Dentistという名の下に歯科治療を行う身分（権利）と義務を負うことになったのです。しかし本学歯学部では、このたびの法改正以前から一貫して診療参加型臨床実習を継続していました。言い換えれば、国の指針である教育システムをいち早く導入し、全国歯学部を先導してきたとも言えます。今年度入学された皆さんは、多くの先生方が培ってきた本学歯学部での学びの場に自負をもち、6年間、4年間が有意義なものとなるよう、学生生活を楽しんでいただきたいと思います。

ところで皆さんは2024年の干支（えと）をご存じですか。辰年と答えたあなた、それは正確には十二支のことです。干支という言葉は、古代中国より始まった「甲乙丙」で始まる十干（じっかん）と十二支を組み合わせた暦の数え方であり、2024年は「甲辰（きのえ・たつ）」にあたります。60年前の「甲辰」年であった昭和39年の日本は、東

京オリンピック開催や東海道新幹線の開業など、高度成長期の中で大きな経済発展を遂げた年でした。そして新潟では、初の新潟開催となった国民体育大会の開催、さらに新潟地震が発生した年でもあります。そして60年ぶりに迎えた「甲辰」。「甲」は十干の第1位であり、優勢であることやまっすぐに堂々とそそり立つ大木を表しています。そして「辰」は十二支の中では唯一の架空の

生き物であり、竜巻や雷などの自然現象を起こす大自然の躍動を象徴するものとされています。ロシアのウクライナ侵攻、円安の中で進む物価高など、世界も日本も先行き明るいとは言えない情勢かもしれません。その中で「甲辰」に入学した皆さんには、まっすぐに堂々と、そして大いなる躍動を期待せずにはられません。





入学を祝して

医歯学総合病院副院長（歯科総括） 多部田 康 一

新潟大学歯学部へのご入学、心からお祝い申し上げます。高校生活や受験生としての生活における皆さんの努力とご家族のご献身に敬意を表し、皆さんを歓迎いたします。

皆さんはこれから歯学部において、歯科医学、口腔保健医療・福祉について学び、そして将来、専門職業人として、またはその指導者や教育研究者などとして社会に貢献することが期待されています。そのためには、卒業と同時にライセンスを持つプロフェッショナルに成長するまでに、決められた年限内での知識、技術、態度における膨大な学びが必要です。新潟大学歯学部においては皆さんが効果的に学習できるようにカリキュラムが組まれており、年度ごとの単位を取得することでプロフェッショナルとなる準備を整えていきます。焦る必要はありませんが、卒業まで計画的に、着実に学び続けることが必要です。学生であれども社会責任のある成人として学習、日常生活における自己管理をおこなってください。

皆さんがこれから学ぶ歯科医学は、専門的な知識と技術を身につけるだけでなく、人として、将来の医療従事者としての成長も追求するものです。高度な診療技術と最新の医学知識は不可欠ですが、それだけでは足りません。質の高い医療を提供するためには、人としての豊かさ、思いやり、そしてコミュニケーション能力が必要であり、医療技術に加えて、社会や個々の患者さんとの関わ

りを通じて得られる情報を整理し、適切な決定を下す能力が求められます。それには、広い視野を持つこと、チームとして働く能力、そして何よりも他人の感情や視点を理解する共感力が必要です。大学生として過ごす時間は皆さんの人間性を深めるための大切な時期でもあります。クラブ活動やボランティア活動、日常生活の中での人々との出会いや関わりを通じて、楽しみながら社会への理解を深めていく時間を大切にしてください。また、ライセンスをとることは最重要の目標ですが、大学生活においては単視眼的にならずに様々な情報や価値観に触れ、考えながら、皆さんの関わる歯科医学・歯科医療、口腔保健医療・福祉の様々な課題の解決、社会における持続性に自分がどう貢献してゆくか考えていただきたいと思います。

新潟大学医歯学総合病院の理念は「生命と個人の尊厳を重んじ、質の高い医療を提供するとともに、人間性豊かな医療人を育成する」です。皆さんの豊かな人間性は、皆さん自身、周りの人々、患者さんとそれをとりまく社会に好循環に還元されます。皆さんの経験すべてが学びです。大学での学習を重んじながらも、色々なことにチャレンジし、楽しみながら充実した学生生活を送ってください。本院において成長した皆さんと一緒に患者さんを診て、研修を行う日を心待ちにしています。

入学者のことば

入学者のことば

歯学科1年 川上 慎太郎

新潟大学歯学部歯学科に入学しました、川上慎太郎です。

このたび、入学者のことばを執筆する機会をいただき、大変光栄です。私は、特に優れた文才や思想、経歴を持っているわけではありませんが、自由に感じたままに言葉を紡ぎたいと思います。

今年度から、新型コロナウイルス感染症の影響によるオンライン授業が解除され、すべての必修科目が対面式となりました。このことについて、授業を直接聞ける機会が増え、学習がより深まると感じるとともに、もう言い訳ができなくなったと感じます。今まで自分の中でコロナ禍は免罪符のようなものであり、本当は失敗を恐れて挑戦しなかったのに、コロナ禍の影響だからしょうがない、新しいことに挑戦できないのは環境のせいだ、と言い訳を自分の中で言い聞かせることができていました。しかしコロナ禍ではなくなった今、挑戦に対する逃げはすべて自分の責任となります。それはコロナ禍でたるみきった私を元に戻すチャンスだと思っています。まずは授業にしっかり出て、課題を丁寧に効率的にこなす学業に集中したいです。

次に、特に興味深い授業科目についてお話ししたいと思います。それが「教養を学ぶ」という授業です。この授業は主にグループワークをしながら、歯科医師についてだけでなく、哲学的な教養についても考える授業になっています。例えば、純粋な子供から「死んだらどうなるの?」「勉強はなぜ必要なの?」「芸術の目的は何なの?」といった様々な質問が投げかけられ、どのように回答するべきかという課題に取り組む授業がありました。まずはこれらの疑問に対して、哲学者の回答を読んで予習し、それを踏まえて自分の回答を

作成します。その後授業内でグループになって各々の考えを話し合い、話し合いの結果を最後に発表します。正直教養というものはあいまいなものなので、授業を通して自分に教養が身についているのかはわかりません。しかし私は、グループワークで普段絶対話さないような話題について考えることで、友人の価値観を学ぶことができます。普段はあまり会話がなく、どのような考え方をしているのかわからない友人でも、この授業を通して知ることができます。6年間苦楽を共にする歯学部生にとって、困難な状況に直面した際に、仲間の考え方を参考にできるという点で、この授業は非常に貴重な時間だと感じています。

(しかしこの前大寝坊をしてしまい、遅刻してしまいました。すみませんでした。)

最後に、奇遇な出会い方をした友人や、境遇が非常に似ている友人、とてもおもしろい野球部の先輩たちをはじめ、私は周囲の方々にも恵まれ、本当に幸せな環境にいると感じています。未熟な面もございですが、6年間、精一杯努力いたしますので、よろしく願いいたします。

入学者の言葉

口腔生命福祉学科1年 佐藤 楓華

入学してからあっという間に今日まで経過しました。最近はずっと暖かい日が続いていますね。私の地元は山形県も良い場所ではありましたが、新潟県は昆虫が家や学校に出てこないのが、快適な一人暮らしを送れています。入学式から始まった大学生活は慣れないこともありましたが、多くの人が模索しながら少しずつ、自立した生活を送り始めていると思います。

大学に入学してから私が一番に感じていることは、両親や今まで支えてくれた人たちへの感謝です。私は一人暮らしをしているので、家事やお金

の使い方は自分で決定して行っています。慣れてしまえば大変なことは多くありませんが、小さな手間の絶え間ない積み重ねによって生活していることを切に思います。今までの自分の生活が、どれだけ両親や周りの人に頼って成り立っていたものであるのかを気づくことが出来ました。これからは、今までとこれからの感謝の気持ちを何かしらで返しながらか生きていきたいと思っています。

話は変わりますが、歯学部に入學した皆さんは入試で面接を経験していますね。全員が何かしらのきっかけや理由を持って、入學したことだと思います。私は前期試験をどこに出願するか、とても悩みました。スムーズに決められなかったからこそ、早い時期から口腔生命福祉学科を志望する人に比べて気持ちが弱いのだと思い不安になっていました。しかし、入試の面接対策のために、広く深く自分の人生と新潟大学での学びについて考えていくにつれて、自分の進路への覚悟が決まりました。その経験があったからこそ、今は迷うことなく勉學に励むことができます。

同級生の皆さんは、社交性や協調性、思いやりを持っていて尊敬することばかりです。自分に足りない能力は、これから吸収していきたいと思っています。今は週に1日しか交流する日がない人が多いので、これから少しずつ親睦を深めることができたらいいなと思います。早期臨床実習では、歯科診療について実際に見学することで、自分の将来像が具体的に想像できるようになりました。一年生から現場を体験することは、今後の学びを考えるきっかけになる良い機会だと思います。五十嵐キャンパスでは、他の学部の人との関わりも持つことが出来ます。私は教育学部の友達が出来たのですが、その子の学科での出来事をサークル終わりに寄ったごはん屋で聞くことが、週の楽しみの一つになっています。五十嵐キャンパスでの学びでは、自分とは違う生活を送っている人とも関わられるので刺激の多い日々を送れています。

歯学部で過ごす4年間を充実したものにできるように、様々な体験を経験していきたいと思っています。口腔生命福祉学科は歯学のみならず社会福祉学も学ぶことができる学科です。どちらの勉

強も怠ることなく、社会人になるために自分を成長させていく4年間にしたいです。最後に、「歯学部ニュース」執筆の機会をいただきありがとうございました。

入學者の言葉

口腔生命福祉学科1年 神林美羽

新潟大学に入學して、約3か月が経ちました。想像していたよりも毎日とても忙しく大変ですが、一人暮らしや学校にも慣れ、充実した日々を送っています。

4月、初めて大学に行き、慣れない環境で緊張と不安でいっぱいでした。友達はあるだろうか、授業についていけるだろうかなどと心配事がたくさんありました。しかし、授業が始まると1限は朝が早く、毎日課題も多くて大変でそんな不安はすぐに忘れていきました。そのおかげもあってか、生活にもすぐに慣れ、学校にも頑張っただけで毎日休まず通うことができました。そして5月には、歯学部運動会がありました。準備を手伝ったり、競技に参加したりして楽しい思い出ができました。運動会を通してたくさんの人とお話しし、仲良くなることができましたように感じます。テストを乗り越え第1タームが終了し6月になると、少し余裕ができました。空いた時間を活用し、自動車学校に通ったりアルバイトをしたりしています。大学生だからこそ自由な時間がたくさんあるので、貴重な時間を無駄にせず、有効に使えるようにしていきたいと思っています。

入學して早々、早期臨床実習が始まりました。実際に病院へ行き、治療の見学をしたり患者役実習をしたりして、これから歯学部で専門的に学んでいくのだという実感がわきました。患者役実習では、6年生に口腔検診や指導をしていただき、患者さんの立場を体験すると同時に、日々の歯磨きや歯並びについて振り返ることができました。治療見学実習では、各専門診療科を回りそれぞれの診療内容を詳しく教えていただきました。実際の治療を間近で見学することができ、とても貴重な経験になりました。

歯学部に入學して新しい仲間と出会った最初の頃は、緊張してうまく話せず仲良くなれるか不安でした。しかし、授業や実習を通じて話してみると、皆さんとても親切にやさしく接してくれて、とても安心したのを覚えています。歯学部の1年生は約60名ですが、その中でも口腔生命福祉学科は22名と少人数です。これから共に同じ目標をもって4年間学んでいく仲間を大切にしていきたいと感じます。そして、困ったときや辛いときは助け合って協力し合い、うれしいときや楽しいときは感情を共有し合いながらみんなで支え合い、4年間を乗り越えていきたいと思います。辛かった受験勉強を乗り越えて新潟大学に合格し、今歯学部で学ぶことができている。合格通知をもらった時の喜びは、今でも鮮明に思い出されます。これから4年間学んでいく中で、学ぶことのできるありがたさを忘れずに、何事にも積極的に挑戦していきたいです。今まで支えてくれた方々や、これからお世話になる方々への感謝を忘れずに、将来は立派な歯科衛生士、社会福祉士として社会に貢献できるような大人になることを目指し、4年間頑張ります。

入学者のことば

小児歯科学分野大学院1年 福地 憲太



新潟大学医歯学総合研究科 小児歯科学分野博士課程に入學しました福地憲太と申します。この度歯学部ニュース令和6年度第1号(第145号)「入学者の言葉」執筆の機会をいただきましたので、僭越ながら寄稿させていただきます。

私は新潟県の生まれで出身大学は昭和大学になります。昭和大学卒業後は、新潟大学医歯学総合病院歯科医師臨床研修プログラムAにて1年間研修を行いました。新潟大学は自宅から車で10分ほどの距離と比較的近く、研修医の時も毎日自宅から通勤しておりました。そのため、私にとって通勤しやすい環境で勉強を継続できることは大きな

メリットであると考え、大学院への進学を決意しました。

私が小児歯科に興味を持ち始めたのは大学5年生の頃です。当時、ポリクリで小児歯科を回っていた時になりますが、小児歯科のフロアに足を踏み入れるまでは私にとって小児歯科という場所は恐怖を感じる場所でした。というのも私自身、治療の際ネットに入れられており、泣いてうまく治療ができないまさに非協力児そのものでした。そのため、歯科医院に通院した経験があり、それが今でも恐怖として記憶に残っています。ポリクリでも同じようにネットに入れられて治療される子供を目にする機会が多くありました。当然ネットに入れられて治療されるという経験はあまり気分の良いものではなく、子供にとっては恐怖すら感じる体験です。小児歯科の先生は子供に怖さを感じないように積極的に声掛けを行うなどして気持ちを宥める努力をされていました。その様子を目にした時、私は先生方のさりげない配慮に感動したこと覚えています。その頃から、私も治療ができ、周囲の方々に対する配慮を欠かさずできる小児歯科の先生に憧れを抱き、私も小児歯科の世界に足を踏み入れたいと考えました。

大学院に進学してから早くも3ヶ月が経ちました。今はまだ始まったばかりで慣れないことが多く、大変に感じるものがほとんどです。しかしそんな中、大学院の先輩や医局の先生方が優しく指導してくださるおかげで毎日頑張れています。

これから大学院生活を通して自らの努力で経験できることを増やしていきながら、4年間の大学院生活を送っていきたくて考えています。また、大学院の先輩方、医局の先生方のサポートを受けながら成長していける恵まれた環境に感謝の気持ちを忘れずに、日々成長の一途を着実に歩んでいきたいと考えています。

入学者のことば

歯周診断・再建学分野1年 瀧川 ほか



今年の4月より歯周診断・再建学分野に入局いたしました瀧川ほかと申します。この度、入学者のことばとして執筆の機会をいただきましたので、大学院進学のエピソードについて拙い

文章ですが書いてみたいと思います。

大学院という進路を考える上で、各科の説明会で聞くお話や歯学部ニュースなどで先生方の“大学院は行ってよかった”と熱意の込められた言葉が必ずあることが印象的でした。その言葉に影響されながら、私もこれから何十年も歯科医師として生きていくにあたり自分のなかでしっかり学んだと少しでも自信を持てる分野がほしいと思い、漠然と大学院進学を考えはじめました。当分野を選んだのは、学生の頃の臨床実習で患者さんの治療計画に携わる中で全ての治療の基盤となる歯周組織の重要性を実感し、歯周治療についてもっと勉強したいと思ったことがきっかけでした。

卒後研修では新潟大学のBコースを選択し、前期半年間は協力型施設である埼玉県の開業医、後期半年間は新潟大学病院歯周病科にて研修させていただきました。開業医では大学病院との違いに圧倒されつつも、確かな経験値で次々に患者さんを診ていく先生方に憧れをいただき充実した研修となりました。大学病院での研修では一人の患者さんについて計画から治療、その効果までじっくり考えることができ大学病院ならではの良さを感じる研修となりました。両施設での研修を通して自分の未熟さを痛感しまだまだ自信がないことの方が多い私には、大学で正しい知識と技術を得ることが最善であると感じ改めて大学院で学びたいと思いました。

入学して3か月がたち、医局の先生方、同期に支えられながら院生の生活にも慣れてきたところです。臨床では、尊敬する先生方の診療をすぐ近くで学べることや、大学での診療と外勤先での診

療にて自分一人で悩んでいるときに先生方が的確なアドバイスとフォローをしてくださる環境が大変ありがたいと日々感じています。研究については、入学前は具体的には想像できずにいましたが、指導医の先生に導かれながら、テーマがあり実際に始まると研究の輪郭がみえてきて、これから先のうまくいく、いかない全てが楽しみで期待を膨らませています。まだ始まったばかりの大学院ですが、恵まれた環境に感謝し、将来の自分が“大学院は行ってよかった”と心底思える有意義な4年間にしたいと思います。

一般大学院生としての進学

口腔生命福祉学専攻博士前期課程1年

五十嵐 美水

この度、口腔生命福祉学専攻博士前期課程に入学いたしました五十嵐美水です。3月に口腔生命福祉学科を17期生で卒業し、引き続き新潟大学でお世話になっております。

現在は、大学院で研究をしながら、夕方には、地域の個人歯科医院でアルバイトをしています。口腔生命福祉学専攻では、新潟大学医歯学総合病院や他の施設で常勤として働きながら進学している先輩方や同期もいますが、そんな中で私は一般大学院生として進学しました。

まずは消極的な理由になってしまっていますが、先輩方のように仕事と研究を両立することができるのかと不安だったためです。アルバイトをしている歯科医院では、新卒にも関わらず非常勤で働くことを快く受け入れてくださり、少しずつ歯科衛生士としての技術を身につけていく様子を温かく見守ってくださっています。また、学部時代の福祉実習でお世話になった新潟市児童相談所で、一時保護所の補助員として働く準備もしています。一般大学院生として進学したことで、口腔生命福祉学科の卒業生が迫られる「歯科と福祉どちらで就職するか」という問題に対して、両方経験することができる第三の選択肢を見つけられたかなと思っています。大学院では、教授の先生方が新潟市の高齢者を対象に長年蓄積してきたデータを使

用させていただき、歯周病関連の研究をしています。研究、授業、アルバイトをこなしても自分の処理能力を超えることがなく、精神的にも身体的にも安定して暮らすことができている。職場、大学、進学を勧めてくれた母親、それぞれに感謝しながら日々を過ごしていきたいです。

2つ目の理由は、良い機会なので研究にしっかり打ち込もうと考えたからです。歯科衛生士として働くのであれば、専門学校・短期大学で3年でのよいところを、大学に進学し4年かけてじっくり学んだ上で、さらに大学院に進学して研究をするのであれば、2年間研究に没頭できる環境が良いのではないかと考えました。幸い、指導担当教員の先生にお力添えをいただきながら順調に研究をすすめることができている。今後、学会発表等にも積極的に参加したいと思っています。卒業2ヶ月を過ぎ、学部の同期と会ったりご飯に行ったりする中で、仕事の話がたくさん聞かせてもらい、歯科、福祉分野で頑張っている同期たちの話を聞いて尊敬や羨望の気持ちを強く感じます。その分、自分の選択を間違いにしまわれないためにも、大学院という環境を十分に活用して血肉に変えていきたいとも感じます。

周りの大学院生や年代と比較して、特殊で恵まれた環境であることに感謝して、仕事でも大学院での活動でも挑戦していきたいと思っていますので、これからよろしくをお願いします。

入学者のことは

口腔生命福祉学専攻博士後期課程1年 鈴木志歩

今年度より、口腔生命福祉学専攻博士後期課程に入学いたしました鈴木志歩と申します。私は、口腔生命福祉学科を14期生として卒業後、社会福祉職として市役所に就職しました。また医療福祉分野についてより深く学びたいと考え、就職と同時に口腔生命福祉学専攻の博士前期課程に入学しました。当初は仕事をしながら大学院へ通うことが出来るのか不安を感じていましたが、親身になって教えてくださる口腔生命福祉学科の先生方

や、家族、友人、職場のサポートによって前期課程を修了し、この春、後期課程に進学することが出来ました。

この度、歯学部ニュースに「入学者のことは」を寄せるにあたり、前期課程での経験や近況、そして後期課程での抱負を述べたいと思います。

前期課程では、研究に関することすべてが初めての体験でした。研究計画書の作成、データの収集・分析と、わからないことの連続でしたが、その都度先生からサポートをいただきながら研究に取り組みました。また学業と仕事の両方に取り組みみて、大変ながらも良かったと感じることが多数ありました。仕事では、生活保護のケースワーカーとして対象者の支援にあたっています。ケースワーカーは1人あたり約80世帯を担当しており、支援を要する方の相談対応、定期的な家庭訪問、生活保護費の計算、各世帯の状況に応じた支援策の検討、援助計画の立案、関係機関との連携などを行っています。日々の業務に取り組む際、会話をする時の対応力や、対象者が希望する支援・必要な支援についての理解などに関して、勉強不足であると感じることが沢山あります。現場で試行錯誤を重ねる中で、大学院での学びを活かし、最適な支援を行うには何が必要であるかを俯瞰して検討出来ること、相談支援の技術について改めて学びを得られることが自身の成長に繋がっていくと感じます。また仕事で実践して感じたことを学業の場で研究に組み込んでいくことで、普段気に留めず受け流してしまう福祉分野の現状を明確にし、より深く学習することが出来ると感じました。

後期課程では、社会福祉士と歯科衛生士のダブルライセンスを活かして保健・医療・福祉分野をより深く包括的に学びたいと思っています。研究への取り組みはまだ始まったばかりで手探り状態ですが、先生方からご指導をいただきながら今自分に出来ることに精一杯取り組み、有意義な大学院生生活を送れるよう頑張っていきたいと思っています。そして福祉現場での学び、研究での学びを支援対象者へ還元していくことが出来るように、努力を続けていきたいと思っています。これからどうぞよろしくお願い致します。

歯学部生の今

歯学部生の今

歯学科2年 若林美樹

旭町キャンパスでの新しい生活が始まり3ヶ月が経ちました。新しい環境にもようやく慣れてきたように思えます。今回は私が2年生に進級し感じたことを紹介していきます。

まず感じたことと言えば勉学による生活リズムの変化です。1年時は好きな時に好きなことができて、良くも悪くも自分がどの学部にも所属しているのかが分からなくなっていました。先輩方から話は聞いていましたが、2年生になってからは予習と復習に追われる日々を送っています。大学受験勉強に励んでいた高校生時代に戻っているかのように感じます。しかしながら、高校生活と大学生活では私にとって大きく違う点があります。それは、同じ目標を持つ友人がいることです。高校生時代、私は友人が決して多いわけではなかったので、人に頼ることができず1人で勉強していることがほとんどでした。同じ意欲で取り組める仲間がなかなかできなかったのです。なので、大学に入り私が最も嬉しかったことは目標に向かって努力できる仲間が周りにたくさんいることです。2年生になってからより仲間の大切さを深く感じています。ひたむきに頑張れる人が多く、この環境が私にとって居心地が良いのです。また、もうすでにいくつかテストがありましたが、高校生時代のように自分だけの勉強では乗り越えることはできなかったと思います。質問したり質問されたりすることでより理解を深めることができます

し、互いに問題を解き合って共有することもできます。今後何年間も勉強をし続けなくてはならない私たちですので、今は大丈夫でも1人では躓くことが将来的に何度もあるでしょう。仲間がいることはとても素敵なことであると感じていますし、そのような仲間を私も大切にしていきたいです。

ここまで読まれると2年生は勉強ばかりの楽しくない日々を送っているのだと思われるかもしれませんが、確かに勉強は大変ではありますが楽しいと感じるのも事実です。大学までの勉強は自分の興味のない分野も学習する必要がありましたが、今の勉強は自分の将来につながっていると実感しながら学習ができ、いざ2年生が始まってみると楽しいと感じる講義がたくさんありました。学習すればするほど良い歯科医師になるためには知識が必要なのであると実感させられます。これが学習のモチベーションになっているので、大変ながらも自分なりに一生懸命頑張ろうという気持ちになれるのです。また、仲間との絆が深まったということもあり、運動会や部活動などでの思い出もできています。どんなに勉強が大切だと言っても息抜きは必要だと思います。勉強は勉強、行事は行事、部活は部活だと切り替えられることも上手く生活していくことのコツです。

最後に、今後2年次の大きな山場である前期定期試験があります。勉強はついていだけで一杯一杯なので不安な気持ちもありますが、仲間と共に乗り越えていきたいです。そして、勉学に励みながらも大学生活を楽しみ思い出をたくさん作りたいと思っています。

歯学部生の今

歯学科2年 佐原 蓮

新潟大学に入学してからはや一年が経ちました。五十嵐キャンパスから旭町キャンパスに学びの場を移し日々の生活を送っていますが、その中で私が感じたことを書こうと思います。

1年生時と比較して最も変化を感じるの、授業についていくことの厳しさです。基本的には1限から4限まで授業が入る生活が続く、授業の内容は専門的で濃く、試験も一夜漬けの勉強では受けることができません。この原稿を執筆中の現在も、これから訪れる試験のことが常に頭の片隅にあります。先輩方は忙しそうだなと去年の私は他人事のように感じていたことが既に懐かしく感じられます。専門課程が始まり歯科医師の道の第一歩を踏み出せた嬉しさを感じると同時に、その厳しさを実感しつつあります。CBT、国試といった将来を意識する単語もたびたび授業の中で耳にします。休日も授業の予習復習に時間を費やす友人は多く、そうしなければ授業についていけません。授業や部活終わりに「これから何するの」ときくと「図書館で勉強する」と返ってくるやり取りは何回繰り返したかわかりません。ですが、歯科医師という職種に直結する授業には学びがいを感じており、勉強に対するモチベーションを維持することができています。実習では実際に人骨を観察して教科書だけではわかりづらい部分の確認や、専門的な器具を使用する実験など、レポート

が大変ではありますが新鮮で新たな発見があります。授業の内容理解に四苦八苦していますが、授業後に友人同士で教えあう姿を見ることも多く、学年の雰囲気はよいものになっているのではないかと思います。授業はほとんど全てが対面であるため、今まで交流が少なかった同期とも毎日顔を合わせるようになりました。グループ学習も増え、共に学んでいく中で新たな一面が見られることも少なくありません。編入生という新しい仲間も加わり、毎日がとても充実したものになっています。

そのような日々を過ごす中で私の息抜きになっているのが部活動の存在です。私は歯学部サッカー部に所属しており、日々の勉強で蓄積したものを体を動かすことで発散できています。夏に全国の歯学部が参加するオールデンタルに向けて日々練習に励んでおり、仲間と同じ方向を向いて努力することは私にとってかけがえのない経験となっています。特に同期には勉強、部活の両面で刺激をもらっています。私が勝手に競争意識を持っているだけなのですが、試験前には同期に負けたくないという思いが生じることもあり、勉強に身を入れることができています。

2年生になってからは時間がいくらあっても足りず、毎日があっという間に過ぎ去っていく感覚があります。2年生を乗り切り、この忙しい日々も思い出にできるように、毎日を楽しみつつ協力し合い、悔いが残らないよう過ごしていきたいと思います。

多忙な3年生の日常

歯学科3年 藤田能亜

月並みな言葉ではありますが、時が過ぎるのはあっという間で、3年生の前期が今まさに終わろうとしています。そのような折、この歯学部ニュースを執筆する機会をいただくことができたため、少しこの3年生を振り返ろうと思います。そして、この歯学部ニュースをご覧になっているということは、少々時間には余裕がある方であると思われるので、この駄文にも目を通していただくと幸いです。

そこでやはり最初に思い浮かんでくるのは解剖実習であります。この解剖実習では普段ではあまり関わりのないメンバーと班を組み、慣れない人体の解剖を週2回も行うため、始まる前から不安と緊張で頭が支配されていました。解剖実習が始まってからはそのような不安感の代わりに疲労感と好奇心が自分の頭を満たしていました。この極限状態のような日々を班員と共に解剖技術の向上と口頭試問に向けた勉強に捧げると、班員との結束が高まり、解剖知識も身に付いてくるため、不思議と楽しくなってくるのです。そして、口頭試問後に班員と行った飲み会は、口頭試問の緊張から解放されたこともあり、どのような飲み会よりも楽しく、自分のなかでは3本の指に入る飲み会であったと認識しています。

3年前期の最大のハイライトが5月下旬から6月上旬の怒涛のテスト期間だと思っています。口頭試問から始まり、口腔組織発生学の実習講義テ

スト、薬理学の中間テスト、どれをとっても学習範囲が広く苦勞したのを覚えています。その上、今年からありがたいことに去年はオンラインだった東北三大戦が対面での復活を果たし、忙しさに拍車をかけました。申し遅れましたが私は弓道部に所属しています。コロナ禍では弓道の個人競技という特性を活かしてオンラインでの大会が成立してしまっただけでなく、非常に楽な思いができました。元来私は面倒臭がりな性格のため、楽なことに味をしめてしまい、正直なところ今年もオンラインで良かったのではと思ってしまう始末です。しかし、今回の東北三大戦ではオンライン大会では味わえない他大学のひととの飲み会を実施することができました。散々文句を垂れてはきましたが、このような場での新しいひととの飲み会はいつでも楽しいもので、最大限満喫することが出来ました。

振り返ってみると先輩方からあれだけ一番忙しいと言われていた2年前期のテスト期間よりも3年前期が大変であったと感じられたため、少しだまされた気分です。そう考えると4年、5年と指数関数的に忙しくなるのではと疑い深くなり、不安で夜しか眠れません。しかし、あまり先のことを考えすぎると辛くなっていくだけなので、気楽に今のこのひとときを全力で楽しみ、満喫していきたいと思っています。

最後になりますが、この3年前期は様々な場での新しい出会いが目立ち、非常に充実したものであったと振り返ることが出来ます。新たな出会いというものとはどんな時でも私の心を踊らせる人生におけるスパイスのようなものです。

歯学部生の今

歯学科3年 宗田 菜穂子

6月も終わりを迎え、2024年があっという間に半分を過ぎ去ろうとしています。3年生になって慣れ親しんだ仲間と共に勉強に部活、遊びと日々生活を振り返ることもなく過ごしていたら、夏がもうすぐそこまで来ていました。今回はこれまでの日々を紹介したいと思います。

3年生の前期で一番印象深い科目は何と言っても人体解剖学実習です。実習をする前は、教科書や参考書などの資料で勉強をしていたが、やはりご献体に接しての実習に対して少しの期待とうまくできるだろうかという大きな不安がありました。解剖学実習は生まれて初めてすることばかりでした。最初はピンセットやメスが思い通りに扱えなかったり、神経なのか血管なのか区別がつかなかったりと時間がかかり戸惑っていました。ですが徐々に慣れてきて、神経や血管の同定や道具の扱いもうまくできるようになりました。実習前は文字やイラストだけの二次元的なものでしか勉強できていなかったの、本に書いている知識は全く実感が伴っていませんでした。実習を行うこ

とにより、この部分は結合が弱く結合組織もあまりないため病気が波及しやすいとか、この場所で病気が生じていたら治しにくいといった本の中の知識と実際のな形で確認することができました。書物の知識がより現実味を帯びたものだと思実感し学ぶことができました。だが、教科書通りでないこともありました。個人によってその人の特徴とする所見があり、神経・脈管の走行が教科書と異なったりするなど違いがあることを知れたことも大きな学びでした。まだ、解剖学実習は続きますが、この貴重な体験を感謝の気持ちを忘れずに充実した時間にしよう頑張りたいと思います。

今年は去年に引き続き歯学部運動会が開催されました。去年は競技部門で2位を獲得しましたが今年は競技部門で優勝することが出来ました。さらにパネル部門でも賞をいただくことができました。日頃の授業、実習で勉強を教え合ったり協力したりして取り組むことで去年より一層、仲を深めることができた成果なのかなと感じました。

最後に今後はより臨床的な学習をしていき、大変なことたくさん起きるでしょう。これまで学んできたことをしっかりと身に付け、勉強も運動も何事にも全力投球する同期のみんなと一緒に大学生活を乗り切っていきたいです。



部活の同期と 運動会にて (著者は2列目の左から1番目)

歯学部生の今

歯学科4年 神林 ゆい

私が推薦入試で合格し、入学してから3年が経ち、4年目がスタートした。これまでの大学生活は想像以上にあっという間で、新生活への期待と不安を感じていた入学式が昨日のこのようである。特に3年次からは講義の内容が基礎的なものから専門的なものが多くなり、人体解剖学実習や歯冠修復学実習などの実習が始まったことでさらに日々が目まぐるしく過ぎていった。

4年次前期では講義はほとんど専門的なものになり、毎日歯科に関する新たな知識を学べた喜びを感じる反面、知識の量の多さからCBTや国試だけではなく、将来歯科医師としてこれらの知識を上手く活用することができるのか不安や焦りを感じることもある。しかし、これまで学んできた基礎的な知識と今学んでいることがつながるときや、自分のこれまでの積み重ねた知識を統合的に使えるときなども多々あり、楽しみながら学ぶことができている。また、4年次に上がり、班で1つの症例に対して話し合い、病態や原因、治療法などをまとめていく時間が増えた。友人たちと共に症例に向き合うことで、これまでのどの知識を活用するか確認出来たり、自分が友人と比べて知

識不足であることを痛感することがたくさんある。日常生活では決まった友人と話しがちになってしまうが、このような機会があることで普段話すことが少ない友人と関わったり、自身の学習に対するモチベーション向上につなげることができている。

前記のとおり、3年次から実習がカリキュラムの中にいくつか組み込まれている。模型ではあるが、実際に歯を切削する内容もあり、歯学生であることを実感できるようになってきた。4年次前期では全部床義歯実習でいちから人工歯を排列し、1/10mm単位の世界で考え手を動かしている。実習では何度も失敗しやり直すこともあり、落ち込むこともあるが、担当の先生とどこが原因で失敗してしまうか考え、アドバイスをいただくことで上手くできたときは次も頑張ろうと思うことができる。上手くいかないことの方が多い実習だが、友人同士で励まし合い、先生方にご指導も頂きながら、よりよい歯科医師を目指して自身のスキルを向上させていきたい。

6年間の歯学生生活も折り返し地点にきたが、CBTやOSCE、臨床実習、国試などこれからが歯科医師を目指すうえで大切な時期になってくる。大学生として学生生活を楽しむことも忘れず、自身が理想とする歯科医師に少しでも近づけるように日々励んでいきたい。



運動会での1枚（著者は1列目の右から2番目）

歯学部生の今

歯学科4年 和久田 大 介

歯学科4年の和久田大介です。今回歯学部ニュースの原稿を書く機会をいただいたので、今年の歯学科4年生と私の普段の生活について書こうと思います。

まずは4年生の紹介です。4年生は44人おり、男子の方が若干多めですが男女比はだいたい五分五分です。クラスの仲が良く、楽しく学校生活を送っています。私は違う大学を卒業し、サラリーマン生活を経て2年次編入しました。そんな私の過去の大学時代と、新潟大学歯学部や同級生を比較して思うことが3点あります。1点目は、同級生は皆真面目で熱心であることです。3年生の後期からレポート、実習の製作物などの提出期限に追われることがとても多くなりましたが、部活やバイトなどで忙しいながらも皆真面目にこれらに取り組んでいます。入学当初は、一回り年上である自分がリードしていこうと意気込んでいましたが、むしろ助けてもらうことの方が多く、しっかり者の同級生に敬服するばかりです。2点目は、クラスの仲がとても良いことです。1学年1クラスで同じ授業を毎日受けていることもありますが、連帯感が強く、この学年に入れてもらえて良かったなと感じています。先日には歯学部運動会がありましたが、綱引きメンバーに選出された男子は、食トレによる増量とほぼ毎日ジムで筋トレ

を行い、更には綱引き必勝マニュアルまで作成して毎日盛り上がっていました（残念ながら準優勝でしたので、来年はさらに増やして10キロ増量計画です。）。57期の皆で助け合いながらポリクリ、CBT、臨床実習、国試などを乗り越えていきたいと思います。3点目は、医療系大学の学校生活はとても忙しいことです。年齢的に体力が落ちていることを差し引いても、新潟大学歯学部での学生生活は、以前の大学生生活の何倍も大変であると感じます。ハードな日々には四苦八苦しながらも、学びの多い毎日に充実感を感じるとともに、熱心に指導していただける環境と先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。

ところで、私は同級生からパパと呼ばれています。それは、私には3歳の息子がいるからです。そのため、学校にいる時間以外も勉強、家事、育児に忙しい日々を過ごしています。ありがたいことに、最近は休日に同級生が息子と遊んでくれることがあります。体力不足の私とは違って元気いっぱい遊んでくれるので、遊んでもらえた日の息子の機嫌はすこぶる良く、いつもとても助かっています。

この原稿を書いている本日は、成長発育学のテストがありました。テスト勉強では、息子の小さかった頃を思い出したり、成長とともに喪失してしまう原始反射が実際に喪失しているかを息子で確認してみたりして、息子の成長を改めて感じました。成長著しい息子に負けないよう、私も成長して立派な歯科医師になりたいと思います。

歯学部生の今

歯学科5年 竹内 蒼

5年生になって早くも3か月が経ちました。そろそろ4年生と名乗り間違えることも少なくなり、緑衣にも慣れてきたところです。CBT、OSCEが約1か月後に迫った今、この原稿を書いているわけなのですが、焦りと不安を抱える毎日から一歩引いて自分を見つめ直す良い機会になっているのかなと思います。

今まで1～4年生でやってきたインプット主体の授業に変わって、5年生では、今まで学んできた知識をポリクリや総合模型実習など実践していくアウトプット主体の授業になりました。ポリクリでは、学生同士ではありますが実際に口腔内へ注射を打ったり、器具を用いて処置をしたりしました。模型では味わえない難しさや緊張感があり、とても良い経験になっています。総合模型実習では、一口腔単位の治療計画を立て、それに沿って治療を進めていきます。今まで点と点だった知識をつなげて治療の流れを考えていくことが、これほどまでに頭を使う難しいことなのだと知りました。これらの実習をしていく中で、自分自身の成長が実感でき、とても楽しく思います。それと同時に、一歩ずつ着実に臨床実習が近づい

てくることを感じ、秋から患者さんを前にすることへの緊張が募っていくばかりです。まだ今後も実習は続いていくので、積極的に取り組み、たくさんのことを学んでいきたいです。

ここからは、学生生活を通して大切だなと思ったことを話していきたいと思います。私がこの4年とちょっとの期間で大切だなと思ったこと、それは「自分の機嫌は自分でとる」ということです。コロナ禍の影響で理想の大学生活とのギャップに打ちひしがれた1年生。勉強量の多さに危うく留年しそうだった2年生。実習の難しさに嘆いた3・4年生。様々な辛いことがあった今までの学生生活ですが、誰かが助けてくれるわけでもないし、現実逃避をしても何も変わりません。そんな日々をうまく過ごすコツは、自分の機嫌をとることだと思います。私にとってそれは部活に打ち込むことや美味しいごはんを食べることでしたが、人それぞれ違うでしょう。ただ心身が健康であれば、大抵のことは大丈夫です。このような点で、勉強だけでなく自分自身の理解も深まった、良い4年間だったと思います。

最初に述べたように、すぐ先にCBTとOSCEが待ち構えています。これらを含め、今後も楽しいことばかりではないでしょうが、可能な限りを尽くして邁進していきたいと思います。



友人と（筆者は中央）

歯学部生の今

歯学科5年 宮田優奈

5年生も半分が終わろうとしており、月日の流れの早さを実感しています。大学生活が始まった当初はコロナ禍でほぼ全ての科目がオンライン授業でしたが、現在は全て対面授業となり運動会などのイベントも開催され始め、コロナ前の状態に戻りつつあると感じ嬉しく思います。

私が5年生になって感じたことは受け身の授業が少なくなり、調べ学習など今まで以上に主体的に勉強に取り組む機会が多くなったことです。PBLや他の科目でもグループワークが多く、人と協力しながら一つのプロダクトを作成しています。他の人の意見を聞くことで、自分にはなかった視点での考え方を知ることができ、毎回良い刺激をもらいながら理解を深めることができています。また、今までの知識を統合して考えることも多くなりました。4年生まではそれぞれの疾患の治療を学び、それについての実習を行っていました。現在行っている総合模型実習では、模型を使って一口腔単位での治療方法や手順を考えていきます。う蝕や抜歯、補綴治療などをしていかなければいけない中、治療の優先順位を考える作業がとても難しく感じました。先生によっても様々な考え方があり、根拠があれば間違いではなく、答えが一つではないところがとても興味深い部分だと思いました。

他にも週2日でポリクリがあり、6、7人のグループでそれぞれの診療科をまわっています。新しい知識を学んだり、今までの学んできたことを臨床に活かしていけるように実践に近い形で実習を行ったりしています。大学病院にある最新の医

療機器に触れる機会もあり、貴重な経験ができてこの環境に感謝しています。少しずつ臨床の現場でのことを経験させてもらえているという喜びを感じる一方で、人に対して医療行為を行うという怖さも感じています。今までは模型を相手に実習をしていたため、正直なところ目の前の課題をこなすことに必死でした。しかし、相手が人であれば感情があり、不快感や痛みなどを感じます。ポリクリを通して人に医療を提供するという責任の重さを改めて認識しました。

7月末にあるCBTとOSCEを乗り越えると、後期からは実際の患者さんの治療を担当する臨床実習が始まります。今はCBTやOSCEの勉強で一杯一杯になっていますが、歯科医師となる自覚を持つだけでなく、どんな歯科医師になりたいのか残りの大学生活を通して自分と向き合い、将来についても考えていきたいです。



ポリクリ 義歯科の相互実習（著者は術者側）

歯学部生の今

歯学科6年 高井 勇 典

この度は歯学部ニュースの執筆という貴重な機会をいただきましたので、これまでの臨床実習を振り返っていこうと思います。

歯学科6年となり今までの講義を受けていた大学生活から一変し、臨床実習という大きく変化した環境の中に身を置いて約半年が過ぎました。日々の臨床実習に協力していただいている患者さん、先生方にこの場を借りて深く感謝申し上げます。実際私たち学生が行う診療というのは歯科医師免許のある先生方と比べると長い診療時間がかかります。一回の診療、約3時間という長丁場の中で協力くださる患者さんへの感謝の気持ちを忘れず残りの実習期間を全うしたいと思います。その中で学ぶべきものを余さず学び、知識と技術の向上に役立てていきます。

ここからは私の臨床実習のエピソードを記していこうと思います。臨床実習自体は5年の10月から始まりまして、当時の6年生から担当の患者さんを引き継ぎ、臨床実習がスタートしました。引き継ぎの際は緊張の中、頼もしい先輩の実習を見学し、外来の機材の場所やユニットの操作の仕方など覚えることもたくさんあり毎日が新しい事の連続でした。そんな中引き継いだ患者さんの治療の継続とは別に新患を担当する機会が巡ってきました。当然新しく来た患者さんなので治療計画を一から考えないといけません。講義や実習など、モデルケースで考えたことはありましたが、実際の患者さんの口腔内では初めてです。私はこの時は初めて一口腔内全体の治療計画を立案する大切

さを実感しました。講義では何度も一口腔内全体で考える大切さを教えられていて分かっていたはずでしたが、この経験は今までのどの教えよりも大きな衝撃でした。治療の順番、治療内容、その根拠、他の治療の選択肢の検討など真剣に考えた事により、治療の流れが頭の中で鮮明になった気がします。この得難き貴重な経験をすることができたこの環境にもう一度感謝申し上げます。

臨床実習では同期の助けも多く借りてきました。臨床実習の中で忙しく辛い時期もありましたが乗り越えられたのは周りで頑張っている同期の姿を見たからです。残りの実習も少なくなってきましたが、55期のみinnで最後まで気を抜かずに実習を終え、次の代に引き継いでいきたいと思えます。



臨床実習風景

歯学部生の今

歯学科6年 村上 令奈

気がつけば、月日が流れるのは早いもので6年生になっていました。6年生といえばやはり臨床実習なので、まずは臨床実習について書かせていただきたいと思います。

5年生の10月に臨床実習が始まり、初めて4階の技工室の存在を知りました。この1年間ここでほとんどの時間を過ごしました。技工室の席は決まっていて、番号順ではなくランダムだったので新鮮でした。今まであまり関わることのなかった同期とも近くの席になり多くの時間を共有し、とても仲良くなりました。

臨床実習では、実際に自分が担当させていただく患者さんの診療を主に行いました。患者さんは優しい方ばかりで長い診療にも文句ひとつ言わず付き合ってください、多くのことを学ばせていただきました。

臨床実習を通して、私が改めて感じたことは、自分のおかれている環境は恵まれているということです。多くの先生方にご指導いただける環境、患者さんにご協力いただいて臨床実習ができていくこと、一緒に努力することができる友達が近くにいること、どんな時も味方の家族がいること、全ての関わった方々・環境に感謝しています。こ

の場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございます。

また、「歯学部生の今」ということなので、少し臨床実習以外のことについても書かせていただきます。私は、飲食店でアルバイトをしています。そこは幅広い年齢層の方がいらっしたり、働いたりしているので、人間関係を学んだり、気分転換になったりします。さらに、部活動はサッカー部に入っていて、マネージャーをしています。つい先日福島県で行われた北医体にも参加してきました。デンタルでは、昨年度第4位の成績をおさめ、また今年度のデンタルは徳島県で行われる予定で、とても楽しみにしています。

このように毎日楽しく忙しく充実した日々を送っております。

現在、多くの科で医局説明会が行われており、国家試験、卒業が近づいているということを実感しております。卒後の進路についてまだ決まっておらず、不安も残りますが、臨床実習も残すところ3ヶ月となりました。6年間一緒に学んできた同期が全国に散り散りになることは少し寂しいですが、逆に言えば全国どこに行っても仲間がいると思うと心強いなと感じます。どんなときも支えてくれる多くの人への感謝の気持ちを忘れず、最後まで気を抜かずにみんなで協力して臨床実習に取り組んでいきたいです。



サッカー部北医体 筆者は最前列左から2番目

歯学部生の今

口腔生命福祉学科 2年 中川 珠 優

2年生に進級してもう3か月が経ってしまいました。去年は週に1回だけ通っていた旭町キャンパスも毎日通うようになり、だんだんと慣れてきたと思います。1年生のころは教養科目の授業をゆるゆると受けていましたが、2年生になって歯科の専門科目が始まりました。とても大変に感じるが増えてきましたが、毎日新しい知識が増え、自分が口腔生命福祉学科の学生であるという自覚ができました。

これまで授業を受けてきて一番印象に残ったのは、早期臨床実習での施設見学です。児童相談所と新潟医療センターと1歳半検診に行きました。実際に見学することで職場の緊張感や働くうえで大事なことなどを知ることができて、将来自分が働くイメージがわきました。ばんだい桜園には行きませんでした。3年生で行くときにたくさん学びたいです。ほかにも、歯科衛生士や社会福祉士として働いている方のお話を聞く講義では、歯科衛生士や社会福祉士の中でもさまざまな職場や仕事内容があることを知りました。前半の授業で

多くの部分を占めていたのがPBLでした。PBLはグループでシナリオから事実をあげ、疑問点や仮説を立て、それぞれで調べてきたものをグループで共有して、理解を深める学習方法です。自分だけでは気づかないことがたくさんあったり、調べたことを共有するので、記憶に残りやすかったりと、PBLを行うことのメリットをたくさん感じています。実際に歯科衛生士や社会福祉士として働いている方の話を聞いたときに、コミュニケーション能力の重要性を実感しました。これから働くために必要なコミュニケーション能力を十分に身に付けるためPBLを頑張っていきたいです。ほかにも、ワックス棒から歯の形を彫刻する授業があったり、人体解剖実習の見学を行ったりとたくさんの貴重な経験をすることができました。学んだことを活かせるようにしたいです。

これから夏休みを過ごし、テストがあります。何事もなくテストを終えられるように準備をしていきたいです。テストが終わると実習が始まります。今まで以上に詳しい知識や技術を身に付ける必要があるため、より一層努力をして学んでいきたいと思います。やりたいことをやって充実した大学生活を送りたいです。



歯の彫刻

歯学部生の今

口腔生命福祉学科3年 上田美怜

3年生に進級してから、早くも3か月が過ぎました。暑い日が続き、外に出ることが億劫になる季節ですが、日々学習や部活動に励んでいます。

3年生になり、大きく変化したことが2つあります。1つ目は、福祉分野の学習が増えたことです。2年生の間は歯科分野の学習が大半を占め、福祉分野の学習と言えば福祉施設への見学実習でした。4月からは福祉分野の講義に加え、PBL方式の授業が始まりました。PBLでは、グループ学習と自主学習を交互に行い、社会福祉士になるための知識を深めます。自主学習をする際には、日本の社会福祉制度に関する法改正や今後の福祉のあり方など、幅広く調べて学びを深めます。なぜその法改正が行われたのかを調べるうちに、残虐な事件があったり、福祉制度の不十分さが露見したりする事実に関心をもち、心を痛めることが多くあります。現行法では解決できないことがあると、もどかしさを感じます。同時に、自主学習では調べきれなかったことを同じグループのメンバーが

補完しているなど、共に学びを深めることができるPBLの学習はとても有意義です。

2つ目は、新型コロナウイルス感染症による規制がさらに緩和されたことです。昨年からは全日本歯科学学生総合体育大会が開催されました。さらに、私が入学してから開催されることがなかった北日本大会が5月に開催されました。私は歯学部バスケットボール部に所属しており、入部してからどちらも開催されるのを心待ちにしていた大会だったので、参加できたことをうれしく思います。同時に、新型コロナウイルス感染症によって失われていた当たり前の日常が戻ってきたことに喜びを感じています。今年の全日本歯科学学生総合体育大会は大阪大学歯学部が主幹となり、8月に開催される予定です。昨年は悔しい思いをすることが多かったため、今年は一勝でも多くできるよう、日々練習に取り組んでいます。

夏休みが明け、テストを乗り越えるといよいよ大学病院での臨床実習が始まります。実際に患者さんを目の前にするのはとても緊張します。2年生から講義で培ってきた知識と相互実習で得た技術を総動員し、精一杯実習に励みたいです。



今年度行われた北日本大会での写真 著者は写真2列目左から1番目

歯学部生の今

口腔生命福祉学科4年 小平幸乃

これまで先輩方の姿に憧れながら過ごしていましたが、ついに最終学年となり、本当にあっという間の大学生活であったと感じます。

4年生になって大きく変わったのは、病院での臨床実習が始まったことです。実際に外来に出て、器具の準備や治療の見学、アシストをさせていただき、実際の現場での業務を感じる事ができ、より歯科衛生士として働くことを意識するようになりました。実習が始まってすでに3ヶ月が過ぎようとしていますが、実際に患者さんに関わるのはやはり緊張します。病院実習では緊張感もありますが、学びも沢山あります。これまでの講義で治療の流れと使用器材について勉強しましたが、種類が多くなかなか覚えられませんでした。しかし、外来で実際の治療を見ると、器具の使用方法が理解でき、それぞれの処置に必要な器具や材料が分かるようになってきました。また、先生や衛生士さんの動作を間近で見ることができ、技術を学ぶ貴重な機会であると感じています。最近はお口の健康室で実習を行い、患者さんにスクレーピング、歯面研磨をさせていただきました。アシストの際に、先生や衛生士さんの処置を見ているため、動作のイメージはできていましたが、実際にやってみると難しく、自分の未熟さに落胆する場面もありました。先生からいただいたアドバイスをもとに経験を重ね、日々学んだことを身につけ、自分でも成長したと感じられるよう実習に励

みたいと思います。

そしてもうひとつ、5月に1ヶ月間の福祉実習という貴重な経験もさせていただきました。私の実習先は精神や知的に障がいのある方が生活されている施設でした。これまで障がいのある方と関わる機会が少なく、はじめは接し方に戸惑っていましたが、施設の利用者さんは明るく優しい方ばかりで沢山話しかけてくださり、初めの不安が嘘のように、とても楽しく充実した実習となりました。福祉実習で学んだ技術で1番身についたと感じるのは傾聴力です。まずはその方のお話を受け入れ、共感することで、相手の心を満たすことができ、信頼関係の構築に繋がります。傾聴することで相手を理解し、その方に最適な支援を提供できると学びました。

福祉実習で学んだことは、病院実習でも生かせると感じます。例えば病院にも障害のある方や高齢の方も多く来院されます。患者さんのお話をよく聞き、歯科治療にあたって必要な支援は何かを考え、声掛けや環境整備など、その方の特性に合わせた配慮を考えて行動できるようにしたいと思います。

4年生になって実習が増え、これまで以上に濃い経験ができており、大変な場面もありますが、友達と助け合いながら非常に楽しく充実した学生生活を送っています。大学でできた友達は、一緒に目標に向かって高め合える、大切な人たちです。私を沢山支えてくれる友達に感謝し、残りの学生生活もクラスのみんなと協力して、みんなと夢を叶えられるよう頑張っていきたいと思えます。

留学生紹介

口腔生化学分野 Muhammad Fadhli Putranto

私の名前はムハンマド・ファドリ・プトラントですが、普段はファドリと呼ばれています。インドネシア出身で、メダンで生まれましたが、大学生のときからスラバヤに住んで仕事をしています。

日本で学び続けることは本当に大きなチャレンジでしたが、昔から日本に戻りたいという夢を持っていましたのでその夢がかないました。戻りたい？そうなんです。昔両親が日本で博士号を取っていたので、私も小学校時代を日本で過ごしました。それ以来、日本は私を育ててくれた国だと思っています。日本は道徳やマナーを非常に大事にしている、それが幼い頃から教えられている日本は素晴らしいと思っています。

新潟大学では、現在歯学部の口腔生化学分野で、照沼教授の指導の下で勉強しています。最初は、生化学や研究方法、さまざまなプロトコルな

どを学ぶことがたくさんありました。このラボの先生や同僚はとても親切で、ゆっくりと教えてくれるので、本当に幸運だと思っています。

初年度には、口腔がんの分野で多くの研究を行いました。この研究を通じて、多くの新しい知識を得ることができました。2年目に入ると、神経科学に焦点を当て始めました。これは私にとって全く新しい分野であり、想像もしていなかったことです。このテーマを深く掘り下げるうちに、興味が湧いてきて、現在も研究を完成させるために頑張っています。

このラボでの時間は、新しい知識や見識、そして多くの経験に満ちています。本当に感謝しており、新潟大学に良い貢献ができることを願っています。これからも日本を楽しみながら頑張ります！



Introduction of International students

口腔生化学分野・口腔薬理学分野 Stephanny Castillo

I'm Stephanny Castillo, a Peruvian PhD student and I have belonged to Oral Biochemistry since October 2023 and I'm doing experiments in the Dental Pharmacology Division. Enrolling in this program is one of the most significant decisions I've ever made, and it became a rewarding and enriching experience of my career and my life. When I started the PhD program it was a challenge for me, as it was the first time I traveled abroad to study, but it has given me the best opportunity for professional growth.



I did my undergraduate studies in National University of San Marcos in Lima, Peru, which is the oldest university in the Americas, known as the “Dean of America” and one of the best universities in Peru. During my undergraduate studies, I had the opportunity to participate in two virtual exchange programs: one at Justus Liebig University Giessen in Germany and other at Mato Grosso Federal University in Brazil. At Jus-

tus Liebig University, I enrolled in different courses, learned German, and connected with students from diverse academic backgrounds and countries. At Mato Grosso Federal University, I attended classes with Brazilian students and gained valuable insights. In addition, I participated in a program called “innovate4health” at the Johns Hopkins Bloomberg School of Public Health with a project on vaccines. It allowed me to be a member of the Primary Health Care Research Center at the Peruvian University Cayetano Heredia and subsequently I won a grant with the vaccine project.



I did my internship in a National Hospital. There, I helped residents from Maxillofacial Surgery and I assisted surgeries, where residents did bone treatments. I saw patient results clinically, but not in in vitro studies; it was then that my interest in bone research was born and I carried out research related to bone measurement in tomography. With my internship experi-

ence, I also participated in the Journal Club of Oral and Maxillofacial Surgery as coordinator, where undergraduate students and specialists discussed articles and clinical cases.

Life in the lab presents its challenges, but it is a rewarding environment in which I continually find opportunities to explore

and learn especially in a topic that is of interest to me such as bone research. This experience has encouraged my personal and academic growth, affirming my decision to be here. I'm deeply grateful for the guidance and support of my senseis and senpais in both laboratories and for the chance to be able to participate in this program.



地域で活躍する歯科医師の姿を見学して

地域歯科保健医療見学ツアーを通して

歯学科6年 高津 彰史

「訪問診療」という診療形態に普段馴染みのない私は、訪問診療とは“患者さんのご自宅に赴いて診療を行う”くらいの漠然としたイメージしか持っておらず、その実際や具体的な診療内容については全く理解していませんでした。そんな昨年の夏、地域歯科保健医療見学ツアーの話を目にし、純粋な興味心から、新潟県歯科医師会の先生方の引率の元、佐渡コースの見学に参加しました。

私が訪問したのは、新潟県佐渡市相川のまもる歯科さんです。院長の渡部先生が、以前私たちに講義をしてくださっていたこともあり、佐渡コースの見学を希望しました。

先生から医院の説明をいただいた後、相川愛広苑で診療の見学をしました。医院のユニットで診療ができない以上、患者さんにできることが限られていますし、流動的に多くの患者さんを診なければいけないので、患者さん一人当たりの時間も少ないという訪問診療の実際を目の当たりにしました。それでも、「できることが限られているから仕方ない」ではなく、「できることが限られている中で最大限のことを行う」先生方の姿勢が非常に印象的で、その光景に強く胸を打たれました。私はこの日だけしか見学をしていませんが、それだけでわかるほどに先生方の動きは組織化・効率化されていて、且つ患者さん全員に寄り添いながら診療にあたっていました。これが一朝一夕にして成るものではないことは明らかでしたし、このような診療形態を確立するまでに、医院の方だけでなく、施設のスタッフの方々とも密に連携を取りながら、訪問診療をよりよい

ものにしてきたその過程まで目に見えてわかるようで、その部分でも非常に感銘を受けました。また、先生は、日々の診療に加え、口腔清掃状態を良好に保つための講演を定期的にされているそうです。先生のされている歯科治療や地域とのかかわりが、住民の生活の基盤の一端を担っている様子を、実際に見て学ぶことができました。

見学前に渡部先生が、まもる歯科さんが掲げるテーマの一つとして「インフラ歯科」をあげていらっしゃいました。これは、以前新潟大学でご講義いただいたときにも話されていたことでしたが、「インフラ歯科」とはどのようなものなのか、地域に根差した歯科治療とはどのようなものなのか、この見学を通して少し理解できたと思います。

見学ツアー全体を通しての感想として、私が一番強調したいのは、訪問診療にあたっていらっしゃる先生方の姿勢です。今の私たちは、外来ユニットでの診療しか知りませんし、大学での講義を通して、「歯科治療ってこういうものなのかな」というような漠然としたイメージが形成されつつある段階にあると思います。だからこそ、この見学ツアーを通して、“こういう形での患者さんのための歯科治療もある”と学べたことは、私にとって大きな財産ですし、ここで得た経験は、実際に行ってみないとわからない、絶対に経験したほうが良いと胸を張って言えるような、そんな素敵な経験でした。

このツアー自体は、昨年が初の試みだったのですが、今年以降も開催される予定だと聞いています。臨床実習もあり、時間を作るのは簡単ではないかもしれませんが、この試みももっと広がるといいなと心から思っています。

最後に、ツアーを開催してくださった新潟県歯科医師会の先生方、見学のお時間を作っていただいた渡部先生、お忙しい中本当にありがとうございます

いました。今回のツアーで先生と患者さんとのかわり方を見て、私の目標、理想とする歯科医師像の輪郭が少し見えてきたような、そんな思いです。今の自分たちは、まだまだ一人前ではありません。しかし、今後の臨床実習における自分たちの日々の積み重ねが、自分たちを一人前にしてく

れるのだと思います。あと半年、臨床実習は続きます。どんな半年間になるかは、自分たちがその時間をどう過ごすか次第だと思います。今回のツアーで学んだこと、感じたことを胸に刻みながら、残りの臨床実習をより充実したものにできるよう、頑張っていきます。



院長の渡部先生との記念写真 筆者は右



実際の診療を見学している様子 筆者は左



地域歯科医療の魅力に触れて

歯学科6年 栗田大地

昨年8月、新潟県歯科医師会からのご案内を受け、地域歯科保健医療見学ツアーに参加しました。このツアーは、地域で歯科医療に携わる先生方の診療現場や活動を見学する機会であり、大学での学びとは異なる貴重な経験となりました。ツアーでの貴重な経験を多くの学生に知ってもらいたいと思い、原稿を書いています。

私が選択した上越コースでは、上越市で勤務されている2人の先生の診療を見学し、またお話を伺うことができました。

まず、上越市国民健康保険牧診療所で勤務されている杉田先生の診療を見学しました。先生は地域で唯一の歯科医師として、地域の方々から大きな信頼を寄せられています。診療室の中だけでなく、地域のイベントや介護施設を訪問して治療が必要な人を探したり、患者さんの方から先生を呼び止めるところを目にしました。先生の医療活動は、単なる治療だけでなく、患者さん1人1人の生活にまで寄り添って行われていると感じました。これは患者さんにとっては単に病気が治る以上の利益があり、医療者にとってもより良い医療を提供できるので、1つの理想的な医療の形だと思います。今後の臨床実習や研修において、患者とのコミュニケーションを重視し、治療後の生活を意識して接することで、より有意義な医療提供

ができるよう努めたいと感じました。

次に、安江たなか歯科で勤務されている安江先生の診療を見学しました。大学病院を経て地域で開業された先生は、地域のニーズに合わせた取り組みを行っており、地域への貢献活動も積極的に行っています。特に、地域の食事支援への取り組みや「カムカム弁当」の取り組みは、地域での医療と生活の結びつきを感じさせるものでした。「カムカム弁当」というのは先生が管理栄養士の方と献立を考えた弁当で、噛む機能の支援にも効果的ながらとても人気のお弁当だそうです。地域のニーズに合わせ、自分がやりたいこと、地域のためになれることを実践できることは、地域で開業する魅力の1つだと先生はおっしゃっていました。

このツアーを通じて、地域での歯科医療の魅力とやりがいを実感することができました。大学での学びとは異なる現場での経験は、今後の臨床実習で活かせるものや、将来を考える上で貴重なものでした。単なる治療だけでなく、患者さん1人1人の生活にフォーカスして接することは、地域歯科医療の魅力の1つであり、私は今後の歯科医師人生でぜひ実現していきたいと感じました。地域での診療や貢献活動は、患者さんとの信頼関係や地域社会への貢献が直接感じられる点が魅力であり、将来の働き方を考える際に重要な視点だと思います。今後の臨床実習、ひいては将来の働き方の参考とするため、ぜひツアーに参加してみたいと思います。



杉田先生が施設へ訪問診療している様子 筆者は左端



入所者さんの義歯を調整している様子

バスケットボール部

女子部部长 歯学科4年 矢田部 真子

こんにちは！バスケットボール部です。私たちは男子部プレイヤー10人・マネージャー2人、女子部プレイヤー12人・マネージャー3人の総勢27人で活動しています。今回はバスケ部の魅力と1年間の活動をお伝えします。

普段の活動は火曜日と土曜日に旭町体育館で練習しています。バスケ部の主な大会は5月にある北日本大会と8月のデンタルです。北日本大会はコロナウイルス蔓延の影響で今年からまた再開されました。以前参加していた北海道大学、奥羽大学の参加がなく、主に開催された宮城県中心の医療系の大学との大会になりました。東北大学は男子女子ともに強豪で、私たちにとっては苦しい試合になりましたが、デンタルに向けてたくさんの課題が見つかったとても有意義な試合になりました。去年のデンタルは男女ともに予選敗退という悔しい結果になったため、今年こそは決勝リーグ進出を目指し部員一同気合いを入れて練習しています。今年のデンタルは大阪大学が主幹ですが、神戸で行われます。昨年の茨城よりも長距離移動で関西での開催なので、観光も楽しみです。

バスケ部は男女ともに大学から始めた人が多く、最初はルールを覚えることやプレーの難しさ

に苦戦しますが日に日に上達し、スターティングメンバーで試合に出場する人がたくさんいます。先輩後輩関係なく教えあい切磋琢磨していても仲の良い部活です。今年は6年生が6人も部活に残っていてくださり、最後のデンタルで少しでも長く一緒に試合ができる様、後輩も気が引き締まっています。バスケ部は先輩後輩の垣根なく仲が良く、部活動の活動外でも先輩後輩で遊びに行くことがたくさんあります。友達の様でもあり、学校生活で困ったことがあれば優しく支えてくれるそんな先輩後輩の関係に惹かれた1年生が今年もたくさん入部してくれました。この部活の雰囲気の良いさがバスケの経験関係なく入部したいと思う理由で、初心者が他の大学より多い理由でもあると思います。

今回はバスケ部の魅力のほんの一部しかお伝えできませんでしたが、今後の活動を通して多くの方に知っていただければと思います。

最後に、私たちの部活動を支えてくださる先生方やOB、OGの方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。部員一同、全力で部活動に取り組んでいきますので、今後とも応援のほどよろしくお願ひします。



北日本大会にて 筆者 中段 左から3番目

歯学部軽音楽部

部活動紹介とOB・OG会を振り返って

軽音楽部 小林 丈 晃

こんにちは。新潟大学歯学部軽音楽部Liars（ライアーズ）の歯学科3年小林と申します。Liarsは主に古町のライブ会場で年に5回ほどバンド活動を行い、各部員が個々の目標を持って主体的に取り組んでいます。医歯学合同の部活が多い中、Liarsは「歯学部軽音楽部」という位置づけで、部員の大半が歯学部生です。今年度は幸いなことに10名を超える新入部員を迎え、総部員数は36名となりました。歯学部の厳しいカリキュラムに対応しながら、学業と部活動の両立を大切にしています。

今回は、7月に開催したOB・OG会の様子を中心にお伝えしたいと思います。今年の新潟大学歯学部軽音楽部Liars OB・OG会は、新型コロナウイルス感染症の影響もあり実に5年ぶりの開催となりました。全国各地から多くのOB・OGが参加くださり、現役部員を含め総勢90名近くが集まりました。Liars結成時の歯学部1期生や2期生（!）といった大先輩方や、OBで現歯学部長の井上先生（!）も参加されるなど、歯学部軽音楽部のルーツを知る貴重な機会となりました。

昼間は旭町キャンパス内の医学部大講堂でライブが行われ、OB・OGの皆さんが素晴らしい演奏を披露してくださいました。演奏技術はもちろん

んのこと、そのパワフルさとエネルギーに圧倒され、私自身も学ぶべき点が多いと感じました。異なる世代が肩を組みながら一体となって盛り上がる姿を見て、音楽には人と人をつなぐ素晴らしい力があることを改めて実感しました。

夜には万代で食事会が開催され、立食パーティー形式で交流を深めました。多くの先輩方と直接会話する機会を得て、非常に刺激的な体験となりました。この食事会はOB・OG会運営の中で特にこだわったイベントで、多くの参加者が楽しんでいる様子を見ることができ、達成感を強く感じました。

今回のOB・OG会を通じて、Liarsの歴史を振り返り、先輩方が築いてきた伝統と絆を改めて感じました。音楽を通じて仲間と絆を深め、歯学部生としての成長も同時に目指し、より充実した活動を続けていきたいと思っています。

最後に、常日頃より活動を支えてくださっている顧問の先生、そして今回のOB・OG会の開催に際して多大なご協力をいただいた先生方、OB、OGの皆様にこの場をお借りして感謝申し上げます。今後とも変わらぬご指導とご支援を賜りますよう、よろしく願いいたします。



OB・OG会 食事会後の集合写真（前から四列目左端が筆者）

研修医プログラムを修了して

協力型施設での研修（プログラムB）

プログラムB臨床研修歯科医 原 拓 未

この度歯学部ニュースの執筆を賜りました研修歯科医の原拓未と申します。私は新潟大学医歯学総合病院臨床研修プログラムBを選択しました。執筆しております現在は7月ですが、この3ヶ月での日々を拙筆ながら書かせていただきます。

私の半年間の研修先は神奈川県横浜市のエス歯科クリニックという現在6院展開している規模の大きい医療法人です。勤めている医院は横浜駅から電車で10分ほどの上大岡駅に位置します。上大岡は美味しいご飯屋が多く、毎日お昼ご飯は先生方と一緒に食べています。横浜なのでいわゆる町中華や家系ラーメンが沢山あって、脂質と糖質を大量摂取している日々です。

上大岡院の1日の患者さん来院数は平均100人くらいで、目まぐるしいスピードで診療が進んでいきます。最初はこのスピード感や、1日の診療

数に中々ついていけず、毎日疲労困憊で、半年間やっていけるのか不安でしたが、先生をはじめスタッフの皆さん方が優しく接してくださり、徐々にその環境にも慣れていくことができました。

普段はアシスタントをしながら、先生の診療の一部分をやらせてもらって、そのフィードバックをして、ということを繰り返しています。また、インプラント手術も日常茶飯事で、多いときには1日に2回見学させていただくこともあります。6月末までに一通りの歯科治療に加え、インプラントの印象採得やマイクロスコープを用いた根管治療など、研修医の段階で中々させてもらえないような処置もさせていただいています。これは先生方の「とりあえず出来なくてもいいからやってみよう」の精神のおかげです。私の拙い診療にも嫌な顔せず、忙しい中でも合間を縫って顔を出してくださる先生方には感謝してもしきれません。

最後になりましたが、残りの研修期間も暑さに負けることなく、無事研修を終えられるように日々邁進していきます。



スタッフ産休時の1枚（著者は上段左端）

大学院へ行こう

包括歯科補綴学分野大学院2年 安野綾夏

私が大学院進学を決断した理由は、もともとは1つしかありませんでした。臨床研修期間があと数か月で終了しようとしていた頃、まだまだ自分は勉強不足かつ経験不足であり、社会に出て実際に患者さんの診療をしてもいいのだろうかと不安に思っていました。臨床研修期間の後半半年は大学の義歯診療科で研修を行っていたので、身近に専門医が何人もいて、気軽に相談ができる環境に魅力を感じ、ここでなら臨床の勉強をしっかりできるのではないかと思ったことが理由でした。

大学院生活が2年目に突入した今、もしも周りに大学院へ進学しようとしている後輩がいたら、ぜひお勧めしたいと思います。なぜなら、どの科の院へ進んだとしても、必ず、人生で今しかできない経験を積むことができると思うからです。大学院生は臨床ももちろんのこと、研究を行うことができることも魅力の1つであると思います。研

究の内容は多岐にわたると思いますが、研究自体の知識や技術を得ることはもちろん、研究を進めていくうえで必要な論理的な思考やゴールを見据えて計画を立てる力は、研究者としてだけでなく、すべての職業にとって必要なことではないでしょうか。大学院ではそのような力が自然と身に付けられると思います。他にも、他の専門診療科の先生とディスカッションできることや、研究を通じて国内外の学会に参加することができること、他病院や開業医へ出張して、いろいろな環境での診療を経験することができることなど、私が大学院進学により得たメリットは数えきれないほどに増えたと思います。

これからも臨床と研究のバランスをよく、日々邁進していきたいと思います。自分の経験が、進路に悩む後輩たちの参考になれば幸いです。

ありがとうございました。

大学院へ行こう

歯周診断・再建学分野大学院3年 安藤大樹

歯周診断・再建学分野の安藤と申します。今回、歯学部ニュースの原稿執筆という貴重な機会をいただいたので、自分の今までを振り返りながら大学院という場所をご紹介できればと思います。

そもそも私は卒業時点で進路を決めきれておらず、大学院と開業医の両方を経験できる臨床研修のBコースを経てからその先を判断しようと考えていました。そこで現在の所属分野にお世話になり、根拠に基づいた医療を行うためのトレーニングに、論文を読み、考える事ができる大学院の環境が最適であると感じたこと、そもそも職場として、雰囲気の良い医局が魅力的だったことから大学院進学と分野への所属を決めました。それから

院生として過ごし実感したのは、大学院には、臨床をじっくり取り組む事ができる、研究に携わる事ができるという魅力があるのはもちろんのこと、1番の魅力は多様な個性を持つ人々と気軽に交流する機会があることなのではないかということです。別の分野の同期をはじめとして、他大学、海外、はたまた歯科以外のジャンルの先生等様々な人と働き、切磋琢磨し、時には飲みに行ったりする機会があります。そこには、歯科医師としてだけでなく、人間として大きく成長するためのヒントに溢れていました。まだ院生として道半ばですが、この4年間は自分の今後の人生にとって大きな意味を持つと確信しています。よければ皆さんも大学院進学を検討してみてください。



長崎の学会にて（筆者は右側）

大学院へ行こう

摂食嚥下リハビリテーション学分野大学院4年 板 離 子

私の大学院進学のかっけは、当科の臨床実習を通して感じた、自分が進むべきはこれだ！という直感でした。「食べる」という当たり前に思っていたことが上手くできず、その方のQOLだけではなく生死にまでも関わる可能性のある嚥下障害に対して、歯科として携われることにとても興味を惹かれました。当初は「専門的に臨床を学びたい」が先行していましたが、この3年で研究の魅力も少しずつ分かってきたように思います。当分野は特に歯科的な関連（舌機能や咀嚼など）については、まだまだエビデンスに欠けている部分があり、例えば嚥下訓練として舌訓練がよく行われますが、その際の舌筋活動についてはまだ解明されていない部分も多く、私の研究テーマはざっ

くり言うとこれでした。自身の研究が進みその事象のことが分かってくると、実際の臨床場面でも理論的に考えたり新たな疑問が生まれたり、気付けば4年生になった今では舌機能の更なる解明を目指して実験に励む日々です。先生方のとても厚いご指導があつてのことであり、まだまだ研究者としては未熟・微力ではありますが、この分野の更なる発展、嚥下障害患者さんへの貢献が少しでもできればと考えています。

最後に、「これを突き詰めたい」という意志があれば、ぜひ大学院進学を考えてみて下さい。大変なことも多いですが、その後の歯科医師としての自身の糧となり患者さんへの貢献へと繋がるはずです。



国際シンポジウムにて、指導医の先生方・同期と（筆者は左から4番目）

令和5年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	田中 梓 （口腔生命科学）	2型糖尿病患者の脳梗塞リスクに対する歯周治療の効果
博士（歯学）	土橋 梓 （口腔生命科学）	Multi-omics analysis of periodontal ligament cells from periostin-knockout mice (Periostin Knockout歯根膜細胞におけるマルチオミックス解析)
博士（歯学）	笹川 花梨 （口腔生命科学）	Matcha green tea exhibits bactericidal activity against Streptococcus pneumoniae and inhibits functional pneumolysin (抹茶は肺炎球菌に対して殺菌作用および肺炎球菌由来の細胞膜傷害毒素ニューモリシンに対して阻害作用を示す)
博士（歯学）	那須 優介 （口腔生命科学）	脳内の興奮性神経伝達物質代謝を担うグルタミン合成酵素の発現制御機構の解明
博士（歯学）	山田 葵 （口腔生命科学）	ヒト脱灰骨基質の骨再生足場材としての有用性
博士（歯学）	呂 暎 （口腔生命科学）	UCP2 polymorphisms, daily step count, and number of teeth associated with mortality in Sado City: A hospital-based cohort study (佐渡総合病院外来患者におけるUCP-2 遺伝子多型、歯数および歩数と死亡率との関連性)
博士（歯学）	岩間 基 （口腔生命科学）	Acellular extrinsic fiber cementum is invariably present in the superficial layer of apical cementum in mouse molar (マウス臼歯の根尖側セメント質の最表層には無細胞外部線維性セメント質が常に存在する)
博士（歯学）	寺田 愛希 （口腔生命科学）	新潟大学医歯学総合病院においてPNAM治療を行った片側性口唇口蓋裂児における外鼻形態変化の長期的評価と治療効果に影響を与える因子
博士（歯学）	山田 貴大 （口腔生命科学）	下顎偏位を伴う骨格性下顎前突症患者の顎矯正手術施行後における顎関節形態の変化
博士（歯学）	坂 暢晃 （口腔生命科学）	Functional involvement of the sternohyoid muscle in breathing and swallowing in rats (ラット胸骨舌骨筋の呼吸ならびに嚥下における機能的関与)
博士（歯学）	氏橋 貴子 （口腔生命科学）	The association between oral function and masticatory behaviors and walking capacity in community-dwelling older people (地域在住高齢者における歩行能力と口腔機能および咀嚼行動との関連)
博士（歯学）	佐藤 理加子 （口腔生命科学）	Tongue and jaw movement measured by 3D motion capture during mastication (3次元モーションキャプチャーを用いた咀嚼時舌運動と下顎運動の計測)
博士（歯学）	早川 結樹 （口腔生命科学）	キサントガム系とろみ調整食品のレオロジー特性と嚥下動態
博士（歯学）	郑 琢扬 （口腔生命科学）	Investigation of Surgical Orthodontic Treatment Indicators - Combination with Index of Orthognathic Functional Treatment Needs (IOFTN) and Maxillofacial Morphometric Analysis. (IOFTNと顎顔面形態分析を併用した外科的矯正治療の適応に関する検証)

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	小林 舞 （口腔生命科学）	Survey of the association between tooth extraction and development of medication-related osteonecrosis of the jaw in patients undergoing cancer treatment with bone-modifying agents （骨修飾薬使用がん患者における抜歯と薬剤関連顎骨壊死の発症との関連性に関する調査）
博士（歯学）	橋爪 孝介 （口腔生命科学）	MCP-1 from conditioned media of mesenchymal stem cells promote bone regeneration through macrophage phenotype switching （骨髄由来間葉系幹細胞培養上清に含まれるMCP-1はマクロファージ極性転換により骨形成を促進する）
博士（歯学）	沢田 詠見 （口腔生命科学）	人工的シナプス形成が損傷した三叉神経の感覚機能を回復できる
博士（歯学）	SIRISEREEPHAP Kridtapat （口腔生命科学）	A Novel Macrolide-Del-1 Axis to Regenerate Bone in Old Age （高齢期の骨再生におけるマクロライド-DEL-1の新機軸）



令和5年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻博士前期・博士後期課程修了者論文名

博士の専攻

分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
修士 (口腔保健福祉学)	小 林 彩 加 (口腔生命福祉学)	地域在住高齢者における歯周疾患の進行に対するTNF- α 遺伝子多型と唾液流量減少の関連
修士 (口腔保健福祉学)	鈴 木 志 歩 (口腔生命福祉学)	生活保護利用者における特定健診受診と医療費の関連－3年間の自治体データを用いた実証分析－
修士 (口腔保健福祉学)	赤 平 愛 華 (口腔生命福祉学)	新潟県の障害者施設における施設ごとの歯科保健の実態
博士 (口腔保健福祉学)	石 山 茉 佑 佳 (口腔生命福祉学)	地域在住超高齢者における舌圧と低栄養リスクの関連
博士 (口腔保健福祉学)	小 川 友 里 奈 (口腔生命福祉学)	障害者福祉施設通所知的障害者を対象とした歯磨きの実行機能支援として視覚支援媒体を用いた歯科衛生士による歯磨き指導の効果



歯学生臨床実習開始前共用試験の公的化

歯学部学務委員長 濃野 要

現在、歯学科の皆さんは5年生時にCBT (Computer Based Testing)、OSCE (Objective Structured Clinical Examination) という2つの試験を受けています。CBTは知識の修得度を評価する試験、OSCEは患者さんに対する態度や基本的な技能の修得度を評価する試験で、まとめて臨床実習開始前共用試験と呼ばれます。この2つの試験では、医療系大学間共用試験実施評価機構が作成した問題・課題を、全国の歯科大学の学生が受験します。昨年度までは合格基準は各大学で設定され、新潟大学ではその合格が臨床実習への進級要件のひとつとなっていました。

一方で、臨床実習における歯学生の歯科医業の法的な位置づけの明確化が求められ、検討が行われてきました。また、日本歯科医師会も学生が行う歯科医行為を法的に担保することが望ましいと提言していました。これらを受けて、歯科医師法が改正され、臨床実習開始前共用試験が令和6年度

より公的試験として扱われることになりました。これに伴い、評価基準は全国で統一され、この試験に合格した学生は「臨床実習生(歯学)」となり、臨床実習において歯科医師の指導・監督の下で歯科医療を行うことができることが法的に認められることとなりました。また、この試験の合格は歯科医師国家試験の受験資格要件のひとつにもなります。

公的化後初試験となる令和6年度は7月第4週に、CBT、OSCEともに実施されました。受験料は両試験併せて38,000円ですが、再試験となった場合の再受験料はどちらか片方の受験であっても、同額の38,000円とのこと。大きな問題がなければ、次年度以降も同時期に行われる予定ですので、これから受験される方は、早いうちから準備を行い、十分な状態で臨まれるようお願いいたします。

教授人事について

令和5年3月末で定年退職された吉羽邦彦先生（口腔生命福祉学科 口腔保健学講座）の後任として、吉羽永子先生が着任されました。

名誉教授称号授与について

2024年3月末をもって本学を退職された小林正治先生、齋藤功先生、魚島勝美先生に名誉教授の称号が授与されました。

令和6年度科学研究費助成事業採択結果について

令和6年度科学研究費助成事業採択結果が発表されました（2024年4月交付内定時点）。新潟大学全体での新規採択件数は207件（前年比40件増）、配分予定額は4億8千7百万円（前年比1億6千2百万円増）、基盤（A）、学術変革（A・B）などの大型種目採択件数は10件（前年比6件増）と前年から大きく飛躍しました。歯学部における新規採択件数・採択率は21件（前年比16件減）・29.2%、大型研究の新規採択件数・採択率として、基盤（B）が4件（前年比1件増）・25.0%、病院歯科の新規採択件数・採択率は23件

（前年比6件増）・56.1%でした。このうち若手研究の新規採択件数・採択率は歯学部6件（5件増）・46.2%、病院歯科16件（1件減）・61.5%でした。

なお中区分（口腔科学およびその関連分野）別にみた過去5年間の新規採択累計数では、新潟大学歯学部の新規採択件数223件（第5位）、配分額428,700,000円（第3位）、1課題当たりの配分額1,922,422円（第3位）、採択率47.3%（第1位）となっています。

インドネシア・アンダラス大学歯学部との 部局間交流協定

歯学部では国際ネットワークの構築を進め、教員の学術交流、学生の交換留学を進めています。

このたび、インドネシア・アンダラス大学との部局間交流協定を締結しました。

アンダラス大学は、医学、理学、工学、法学、経済学部などを有する総合大学であり、ことに医学部では、スマトラ島における地域の医療と健康に多大な貢献を果たしています。同大学歯学部は、地域の要請を受けて2012年8月に同大学の13番目の学部として開設され、世界的に競争できる医療機関・研究機関を目指しベトナムホーチミン医科薬科大学口腔科学部との協定を結ぶなど、同大学のビジョン達成に向けた活動が盛んになっています。2024年4月20日に、井上学部長がインドネシア・アンダラス大学のNila Kasuma歯学部

長と対談し、学術交流を進めたいとの意向をうかがう中で部局間交流協定の合意が得られ、このたびの締結にいたりました。



国際シンポジウム開催について

2024年5月31日・6月1日の2日間の日程で、部局間交流協定締結校であるタイ・マヒドン大学歯学部との共催により国際シンポジウム「International Collaborative Symposium on Development of Human Resources in Practical Oral Health and Treatment 2024」がタイ・バンコクにて開催されました。本シンポジウムは、口腔保健、歯科医療分野における若手人材育成とアジア地域を中心とした共同研究ネッ

トワーク形成を目的に新潟大学歯学部が開催しているもので、COVID-19パンデミックが収束する中で、昨年オンラインにより再開し、今回4年ぶりの現地開催となりました。本学歯学部からは、教職員23名、大学院生24名が参加し、アジア各国、地域からはASEAN諸国をはじめ、香港、台湾、ネパールから、欧州からはルーマニアからも参加者があり、各大学歯学部長を含め総勢150名以上の研究者が集い、交流を深めました。



QSランキングについて

このたび、今年度の分野別QS世界大学ランキングが公表され、歯学分野において、新潟大学歯学部は大阪大学歯学部、東北大学歯学部とともに日本で第2位、世界第51-80位にランクされました (<https://www.topuniversities.com/subject-rankings>)。QSランキングとは、英国の世界大学評価機関クアクアレリ・シモンズ

(QS) がAcademic reputation (研究者による評価)、Employer reputation (雇用主による評価)、Citations per Paper (論文の被引用数評価)、H-index Citations (H-indexに基づく研究評価)、総合評価などをもとに毎年発表している大学ランキングであり、世界で最も広く使われている大学評価指標のひとつです。

新潟大学歯学部オープンキャンパス2024

新潟大学歯学部オープンキャンパスが、8月8日(木)、9日(金)の両日開催されることとなりました。今年是对面型(事前申し込み必要)の

の実施を予定しており、両日ともに午前、午後の2回のイベントとなります。

予防歯科学分野の紹介

予防歯科学分野 教授 小川 祐 司

・はじめに

この度歯学部ニュースにて分野紹介の機会を頂きましたので、予防歯科学分野の活動内容についてご紹介いたします。

・臨床について

予防歯科の特徴的な診療として口臭治療があげられます。近年ではマスク生活による口臭の訴えが増加し、口臭治療のニーズも多様化しています。このため、ガスクロマトグラフィーやオーラルクロマといった精密機器を使用してVSCを客観的に測定し、データに基づいたテーラーメイドの治療を実践しています。

また、う蝕学分野と協力して、う蝕予防管理システムの導入にも参画しています。本システムで

はリスクマネジメントに基づいたメンテナンスを具現化し、生活習慣の改善を含めた包括的なアプローチを可能にしています。これまで約50名の患者さんがう蝕予防管理システムによる恩恵を受けており、さらに多くの患者さんに対応できるよう現在体制を整えています。

・研究について

血液・内分泌・代謝内科学分野と協力し、糖尿病患者への歯周治療が脳梗塞や心筋梗塞に及ぼす影響について、Lox-indexを指標に臨床研究を実施しています。また、平成10年から高齢者コホート研究（新潟高齢者スタディー）を毎年遂行し、口腔の健康が全身の健康に及ぼすメカニズムを多角的に検証しています。研究対象者は開始時点で70歳、昨年度95歳となり、25年間同一の対象者を



予防歯科構成メンバー

追跡している調査は国内外ともにほとんど無いため、研究データの学術的インパクトは大きなものになっています。

・教育について

衛生学（歯学科3年、口腔生命福祉学科2年）、う蝕学（歯学科3年）、予防歯科学（歯学科4年）、予防歯科学実習（歯学科4年）を主に担当しています。予防歯科学実習では学生をテーマ別グループに分け、課題の設定からデータの取得、分析まで学生が主体的に取り組めるプログラムを構成しています。実習の最後にはプレゼンテーションを課し、研究の流れを理解することで問題解決への

実践力向上を目指しています。

・おわりに

当分野では、研究をはじめ多方面の方々との協働を実践・経験することができます。その先には、当分野がWHO口腔保健協力センターである点を生かして国際機関で保健活動に従事したり、国内各行政機関で活躍する道もあります。臨床予防歯科、地域歯科保健、国際口腔保健など広い視野のもとに口腔保健の推進に興味のある方々には、ぜひ当分野の扉を叩いてみていただければ幸いです。



顎顔面口腔外科学分野の紹介

顎顔面口腔外科学分野 教授 富原 圭

口腔外科は、口腔癌や顎変形症、口唇口蓋裂などの高度口腔疾患を扱うため、歯科の知識のみならず医学的な知識や技術の習得も必要とされます。口腔外科入局後の将来像としては、①口腔外科を学んで開業する、②病院歯科で口腔外科医としての専門性を生かす、③大学病院でより高度な専門性を磨く、といった3つのキャリア形成があります。そのため、入局者のキャリアプランに合わせた教育と指導を行います。

また、当科には、北は北海道から南は沖縄まで国内に広いネットワークがあり、このネットワークを生かして他県の病院での研修も可能です。もちろん、気に入った地域があれば、そのままご当地の病院に就職も可能です。

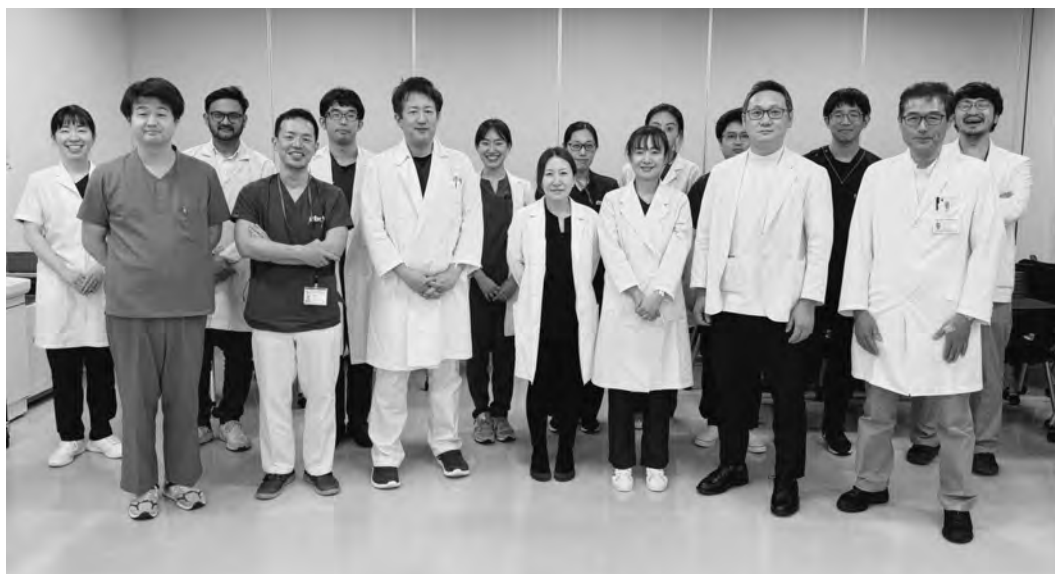
当科ではさらに、国際交流によるグローバル人材の育成にもそろそろ本腰を入れたいと考えております。特にアジア諸国は、日本と比べて症例が多く、短期間で多くのトレーニングを積むこともできますし、アジアにおけるチャリティー手術にも参加できます。

未曾有の少子高齢化、人口減少社会を迎えた我

が国では、歯科医療の需給体制もこれから大きく変化します。歯科を受診する多くの高齢者が、基礎疾患をかかえ、様々な投薬治療を受けています。安心・安全な歯科治療を提供するためには、歯科医師も全身疾患に対する理解が必要であり、最低限の全身管理能力が求められます。

これまで口腔外科は、歴史的にも、時に医科と歯科の争点になり、干渉を受けながらも生き抜いてきた診療科です。しかし、今や医科歯科連携の時代となり、口腔外科は、医科と歯科の大切な接点として、国民の健康増進に貢献しなければなりません。口腔外科は、アナログからデジタルの時代へと技術革新が進み、治療の質が飛躍的に向上してきました。また、AIや情報科学との融合は、新たな診断技術の可能性をもたらしています。

無限の可能性を秘めた口腔外科の将来には、若い英知とパワーが必要です。高度口腔疾患の治療に携わりたい、新しい学問に興味がある、国際交流に積極的に参加したいなど、チャレンジ精神旺盛な皆さんの入局を大歓迎いたします。



令和6年度の教室員

教授に就任して

教授に就任して

新潟大学大学院医歯学総合研究科
包括歯科補綴学分野 堀 一 浩

このたび、2023年12月1日付で新潟大学大学院医歯学総合研究科包括歯科補綴学分野教授を拝命致しました、堀 一浩と申します。

私は、1998年に大阪大学歯学部を卒業後、大阪大学歯科補綴学第二講座に入局いたしました。野首孝祠名誉教授、前田芳信名誉教授に師事し、有床義歯治療を中心に臨床研究教育を行ってまいりました。特に、小野高裕名誉教授には入局当時より顎顔面補綴治療を教えていただき、咀嚼嚥下時における舌と口蓋との接触圧（舌圧）計測をテーマに学位をご指導いただきました。2009年には新潟大学へと赴任し、井上誠教授のもと摂食嚥下リハビリテーション学分野に携わりました。その後、2015年に小野高裕名誉教授が包括歯科補綴学分野教授に着任されたのを機に、再度補綴学分野へと移籍して現在に至っております。

包括歯科補綴学分野では、有床義歯補綴学や顎口腔機能学を担当しています。食事や会話の機能が低下する原因は、歯を失うことだけではありません。舌や唇などの口の中の器官の形態や動きが大きく影響します。そのため、口の中の形態や機能、感覚を包括的に評価診断し、対応を検討する必要があります。我々は、加齢、要介護、外科的切除や脳血管疾患などの理由により歯を失った患者や機能が低下した患者に対して義歯治療やリハビリテーションを通して機能改善をはかることを目標としています。新潟大学で歯科補綴学だけでなく、摂食嚥下リハビリテーションを専門とする

経験を得たことは、私にとって包括的な補綴治療のための幅広い視点を与えていただいたものと考えています。

このような観点から、研究においても口腔機能評価を中心として様々な手法を提案して参りました。大学院時代からの研究テーマであった機能時の舌運動の測定では、Swallow scanという専用の薄型のシートを開発し、様々な疾患における舌圧発現の特徴や、物性が異なった際の舌圧の変調を明らかにしてきました。最近では舌運動を3Dモーションキャプチャーすることにより、詳細な舌動態を分析しています。また、グミゼリーを用いた咀嚼能率評価法について、スマートフォンを用いて画像解析できるようなアプリケーションを製作しました。さらに、普段の食事です使えるウェアラブル型の咀嚼回数計や、スマートフォンを用いた舌苔画像評価など、近年の技術革新に応じた開発を行い、これらを用いた研究を行っています。今後は、これらの技術を幅広く使っていただけるように普及させる必要があると考えております。

現在当分野には25名が教室員として在籍し、日々臨床教育研究に頑張ってくれています。50年を超える当分野の歴史を引き継ぎ、新たな技術を分野の垣根なく融合させながら、歯科補綴を通じて国民の皆様の口腔の健康に寄与したいと考えています。新潟大学歯学部の先生方には様々な面でご指導いただき感謝の念に堪えません。浅学の身ではありますが、歯科補綴学の発展に貢献できるように今後も一層精進してまいり所存でございます。引き続きご指導、ご鞭撻を賜りますよう、今後ともよろしくお願いいたします。

教授に就任して～教育・研究についての抱負

口腔生命福祉学講座 口腔保健学分野
吉 羽 永 子



2030年に向けた新潟大学
将来ビジョンでは、「未来
のライフ・イノベーション
のフロントランナー」にな
ることを掲げております。
これを受け、新潟大学歯学
部では、「健口長寿社会へ

の貢献」、「人材養成機能の強化」、そして「強みのある研究推進」を3つの柱として挙げております。私はこの3つの柱の推進のために、口腔保健学分野の立場から下記の様に取り組みたいと考えております。

歯科医師歴約30年の間、教育では実習を中心に担当してまいりました。臨床実習を含め週2～3日は学生実習に注力し、口腔生命福祉学科の教育では、第一期生から現在に至るまで担当し、早いもので20年が経ちました。臨床実習の現場で学生さんと一緒に学んできたことは、「歯科医療は、口腔ケアを介して、自立した高齢者の育成に直接関わっている」という事実です。「国民皆歯科検診」制度の検討が始まっており、義務化の目的は主に、国民の健康長寿を伸ばすことにあります。そのためには、若い時からの予防の指導と、その後の豊かな食生活に基づく自立した老後へと繋げる必要があります。チームプレーが重視される医

療の現場では、歯科医師・歯科衛生士どちらの力量も上げることで良い医療の提供が可能になります。社会で信頼され活躍できる歯科衛生士・社会福祉士の育成に携わることは、口腔生命福祉学科のある新潟大学歯学部における全教員の責務であると捉えてまいりました。今後、新潟大学歯学部口腔生命福祉学科の輩出する「ダブルライセンス」の活躍の場は今まで以上に重要になります。そういった意味でも、歯学部の皆様のお力添えが必要となります。今後とも、それぞれの現場でのご指導のほど、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

研究では、2021年に文科省「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業」に採択されて以来、歯学部6Fにある研究センターで研究をしております。ここでは、海外で素晴らしい業績を積み帰国後もactiveすぎるほどに研究を続けていらっしゃる先生方が指導されているせいか、海外からの大学院留学生も非常に優秀です。加えて、学内の日本人大学院生の皆さんも出入りされる様になりました。「99%の苦しい研究を耐えることができるのは、1%のワクワク感を共有できる仲間がいる」からこそで、そういう視点からも人材の育成に貢献できればと考えております。

新潟大学歯学部歯学科の学生さんの約半数は女性であり、口腔生命福祉学科に至ってはほぼ100%が女性です。こういった状況を見ましても、ライフイベントと仕事の両立は当然のことながら、「研究力」「教育力」「診療力」および「運営力」を伸ばし、上位職を目指す女性を支援する環境（体制）作りも必要かと考えております。

素顔拝見

歯科矯正学分野

市川佳弥

2024年2月1日付けで歯科矯正学分野の助教を拝命いたしました、市川佳弥（いちかわ かや）と申します。僭越ではございますが、この場をお借りして自己紹介をさせていただきます。出身は長野県千曲市（小学校低学年までは長野市）ですが、母の出身が新潟県のため長岡市で生まれました。大学は北海道に憧れがあり、北海道医療大学に進学しました。大学卒業後、新潟大学医歯学総合病院歯科総合診療部での研修が決まり、その年から新潟で暮らし始め現在に至ります。生まれは新潟、育ちは長野、大学時代は北海道、就職は新潟と、雪国を転々としていますが、非常に寒がりです。なぜ暖かい地域に住まないのか、自分でも不思議なほどです。

幼少期は、水泳、習字、バイオリン、クラシックバレエなど、たくさん習い事をしていましたが、ほとんどは身が入らなかったり、転居したことで辞めてしまいました。その中でも唯一クラシックバレエだけは長く続き、高校入学まで10年以上通いました。元々は親に無理やり連れて行かれたため、レッスンに行ってもやりたくない、と頑なに踊らなかったそうです。それでも気が付けば週7日間毎日通うようになっていたのですから、何がどう転ぶかわからないものです。元々体力もなく、身体も硬い方でしたが、バレエを積極的にやるようになった小学校中学年頃からは毎晩筋トレとストレッチをルーティンにしていました。するとみるみるうちに身体が柔らかくなり、筋力がついたことで苦手だった運動も楽しめるようになりました。苦手なことでも困難と思われることでも努力を積み重ねるとできるようになる、その経験が今となっては私にとってコアの部分となっているように思います。

2015年に歯科矯正学分野に入局し、今年で10年

目の節目の年となります。大学院入学の際は、矯正歯科と口腔外科どちらへ進むか悩みましたが、元に戻す治療ではなく新しく創り出す創造の医療（前教授、齋藤功先生の言葉）への興味が強く矯正歯科医となる道を選びました。入局当初は単に矯正治療を修得することが目的でしたが、口唇裂・口蓋裂の臨床研究に携わったことで、チームワークの重要性を学びました。口唇裂・口蓋裂の治療は、形成外科、耳鼻咽喉科、言語治療室、口腔外科、小児歯科の先生、歯科衛生士さん、看護師さん等、たくさんのスタッフの方々との連携が必須です。日本全国でも新潟大学のチームワーク力は非常に強いと感じます。このような環境で診療に携わることができ、とても楽しいですし、たくさんの方々に助けていただけて本当に有難く思います。そしてこのチームワークはどんな仕事でも、プライベートにおいてもとても大切なことだと痛感しています。今後は今まで先輩方から学んだことを、少しでも後輩に伝えられるように努めていく所存です。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。



菩提寺山にて
（筆者は左）

予防歯科学分野

星野剛志

2024年2月1日付けで予防歯科学分野の助教を拝命

いたしました、星野剛志（ほしのたかし）と申します。この度、「素顔拝見」を執筆する機会を頂戴いたしましたので、この場をお借りして自己紹介させていただきます。

出身地は埼玉県の草加市というせんべいが少し

有名な所です。小学生時代は野球、水泳、ピアノ、空手と習い事をこなしていく日々で、中学生時代は野球部で3年間厳しい指導を受けました。高校は、クレヨンしんちゃんの舞台である春日部市にある県立春日部高校に進学し、水泳部に入部しました。平日は2 km、土日は3～5 km泳ぐなど練習はつらかったですが、男子校ということもあり男同士気を遣うこともなく、自由気ままに過ごしました。高校卒業後は1年間浪人した後、新潟大学に進学しました。部活は軟式野球部とゴルフ部に入部し、良き同期・先輩・後輩と楽しい時間を過ごすことができました。

趣味はMLB二刀流プレーヤーの大谷翔平選手の活躍を観ることです。「遊びたい。飲みたい。いろいろやりたい。そんなんでも優勝できるわけないですからね。勝ちたいんだったら野球をやるしかないんです」。彼が20代前半に同僚選手に向けて放った言葉ですが、この一意専心の精神が個人的に好きで、日々彼の活躍を楽しみに過ごしています。また、最近は職場の後輩と出かけたり、みんなで食事に行ったりと、新しい楽しみもできました。

現在の仕事としては、高齢者の口腔機能の現状や実際の検査・評価方法などについて、アジア地域に普及する活動をしています。日本では2018年に「口腔機能低下症」という正式な保険病名がつき、その検査と管理が医療保険に導入されることで注目を浴びるようになりました。一方で、他のアジア地域ではまだ口腔機能に対する評価や対策が進んでいるとは言えない状態です。2050年にはアジアの多くの国で65歳以上の高齢者の割合が14%を超える高齢社会になると予測されています。したがって、いち早く超高齢社会に突入した日本が、高齢者の口腔機能を維持・向上させる重要性について伝えていく必要があります、そのお手伝いをさせていただいています。

最後になりましたが、今後は教育にも携わることでこれまで以上に多くの方々にお世話になると思います。微力ではありますが、一教員として新潟大学に貢献できるよう努めてまいりますので、これからもどうぞよろしくお願いたします。



顎顔面口腔外科

木口哲郎

顎顔面口腔外科の木口と申します。生まれは埼玉県所沢市なのですが、転勤が多く、北海道を経て2歳から茨城で16年間過ごしました。茨城の中では、土浦市というところが最長10年いました。土浦の花火大会は、長岡とともに日本三大花火に数えられ、秋の涼しい時期に開催されますので、まだの方はぜひ行って見てください（ちなみに三大花火の最後の1つは秋田県大曲です）。

私は2008年に本学44期生として入学しました。学生時代は同期生と飲み会などで付き合いながら（お酒は最弱で少し飲んで顔真っ赤になって終了です）、部活は弓道部に入りました。大学から始めた弓道ですが、2年生の春から団体戦レギュラーになってしまい、先輩の足を引っ張らないよう必死でした。オールデンタルでは、鹿児島や岡山など普段なかなか行く機会のない場所へ遠征に行くことができ、6年間部活動を満喫できました。

2014年に新潟大学を卒業し、Bコースで1年研修後、顎外科の大学院に入学しました。院1年は口腔外科と麻酔科の臨床、院2年から歯科薬理学分野で学位研究を行いました。基礎研究で新しい発見が増える楽しさを覚えながら、残りの大学院生活を送っていました。2019年に大学院を卒業し、関連病院（長岡赤十字病院1年、新潟中央病院2年）へ出向しました。3年間どっぷり基礎研究に浸かった自分にとって、久しぶりの埋伏歯抜歯にすら苦戦する日々から始まりましたが、徐々に口腔外科臨床の知識、技能を身に付け、口腔外科学会認定医と有病者歯科医療学会専門医を取得させていただきました。

2022年から大学に戻り、口腔外科関連の仕事に従事していると思うところは、口腔外科を勉強してきた本当によかったという点です。外科処置のみならず有病者の管理や歯科治療なども経験でき、治療の幅が広がります。学生の頃、歯科医師過剰時代と言われて育ってきた世代ですので、一般歯科以外に何か武器となるものを身に付けたい思いで口腔外科に道に進みましたが、ここまで続くと

は自分でも思いませんでした。最終的に口腔外科に残らないとしても口腔外科を少しでも経験していれば将来必ず役に立ちます。進路を決めていない学生や研修医は短期間でも口腔外科研修を検討してみてください。

大学卒業から10年、新潟生活も16年と、気が付けば茨城の生活期間に追いついてしまいました。今となっては、同期は半分以上新潟を離れ、地元

で歯科医院の継承や開業、都会への憧れ？から東京進出する人など様々です。44期生で新潟大学に残っているのは、私と義歯診療科の大川先生の2人だけです。

最後に私生活についてですが、週末は生後6か月の息子と遊んだりしています。将来、歯科医師にさせるか未定ですが、順調に育ってくれればと思います。



学会受賞等報告

第1回「未来をつくる こどもまんなかアワード・内閣府特命担当大臣表彰 未来へつなぐ「応援団」部門」

第1回「未来をつくる こどもまんなかアワード・ 内閣府特命担当大臣表彰 未来へつなぐ「応援団」部門」受賞

摂食嚥下リハビリテーション学分野 井上 誠

このたび、にいがた摂食嚥下障害サポート研究会（会長 井上 誠）が、第1回「未来をつくる こどもまんなかアワード」において、「内閣府特命担当大臣表彰 未来へつなぐ「応援団」部門」を受賞しました。この賞は、「こどもまんなか社会」の基本理念の実現に向け、内閣府が、取り組みを実施する団体又は個人を表彰するものです。令和5年11月27日（月）に総理大臣官邸において表彰式が行われ、岸田文雄総理大臣からのお祝いのお言葉をいただくとともに、加藤鮎子こども政策担当大臣から表彰状が授与されました。

にいがた摂食嚥下障害サポート研究会は、新潟県内における摂食嚥下障害への理解促進及び摂食嚥下障害に係る介護関連用品並びに介護サービス産業の質的向上を図ることにより、摂食嚥下障害者のQOLの改善及び関連産業の活性化に寄与することを目的として平成21年6月18日に発足され

ました。定例のセミナー開催に加えて、新潟大学医歯学総合病院敷地内に設置し、介護食や口腔ケア用品などの展示を行う「食の支援ステーション」の運營業務などを担っています。また、平成21年からはホテルのシェフと創意工夫を重ね、摂食嚥下障害児およびその家族に外食を楽しんでもらう「ばりあふりーお食事会」を開催してきました。コロナ禍を経て、令和5年10月には本学摂食嚥下リハビリテーション学分野との共催で4年ぶりに食事会を再開しました。この度のこどもまんなかアワード受賞は、長年にわたるこの食事会の取り組みに対して与えられたものです。2023年には、多くのレストランが同様の取り組みに参画いただくための資金調達として新潟大学クラウドファンディングを行い、医療関係者のみならず新潟県内外の多くの皆様からも広く賛同を得ています（寄付総額8,201,000円、寄付者362名）。



（こども家庭庁提供）

第82回（公社）日本矯正歯科学会学術大会 優秀演題賞を受賞して

歯科矯正学分野 大川 加奈子

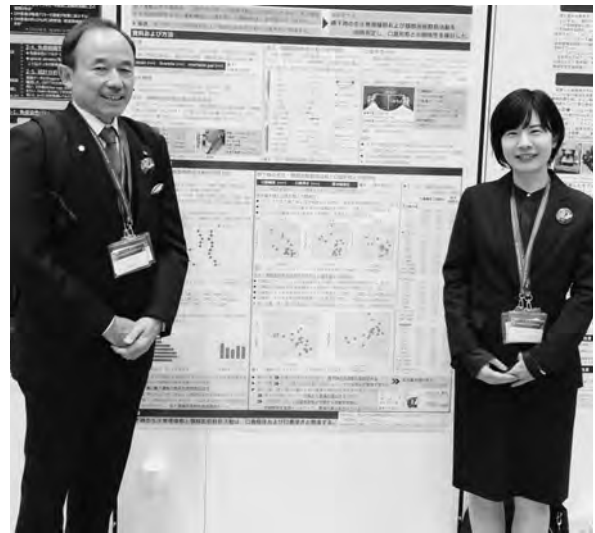
この度、2023年11月1日～3日に朱鷺メッセ新潟コンベンションセンターにて開催された第82回日本矯正歯科学会学術大会において優秀演題賞を受賞致しましたので、ご報告致します。

発表内容は「嚥下時の舌圧発現様相および顎顔面筋群筋活動と口蓋深さとの関係性」と題し、嚥下時の舌圧発現様相および顎顔面筋群筋活動を同時測定し、口蓋幅径および口蓋深さとの関係性を検討しました。その結果、狭く深い口蓋では、口蓋後方部の舌圧最大値は低下し、口腔周囲筋の活動時間が延長し、嚥下時の舌圧発現様相および顎顔面筋群筋活動は口蓋幅径および口蓋深さと関連することが明らかとなりました。

本学会では大会運営を担当致しました。発表以外の場においても、多くの方々と交流を持てたことを大変嬉しく思います。本学会での経験は、人生の糧となるとともに、日々のモチベーション向上につながったように思います。

最後になりますが、ご多忙にも関わらず、お時間を費やしご教示賜りました齋藤功教授、丹原惇

先生、高橋功次朗先生、福井忠雄先生、包括歯科補綴学分野の堀一浩先生、大川純平先生、大阪歯科大学高齢者歯科学講座の小野高裕教授に心より感謝申し上げます。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



齋藤功教授と学術展示会場にて（筆者右）

第73回日本口腔衛生学会学術大会 論文奨励賞受賞報告

口腔保健学分野 諏訪間 加 奈

この度、第73回日本口腔衛生学会学術大会において、2024年度論文奨励賞を受賞いたしましたので報告いたします。本賞は、「口腔衛生学会雑誌掲載論文で論文発表時点にて会員歴3年以上、かつ原則40歳未満の会員」から選出されるものです。

受賞論文は、「アルコール摂取状況と歯の喪失との関連についての研究：魚沼コホート研究ベースライン調査」です。本論文では、アルコール摂取状況は歯の喪失と関連し、現在飲酒者においてアルコール摂取量が多いほど関連が強く、その関連の程度には性差がみられました。今後、追加調査の結果から縦断的な評価を行いたいと考えています。

末筆ではございますが、ご指導賜りました本分野の葭原明弘教授、健康増進医学講座の伊藤由美

准教授、北海道大学の岩崎正則教授ならびにご協力頂きましたすべての皆さまに心より感謝申し上げます。



授賞式後に本分野の先生方とともに
(左から3番目が筆者)

Arthur Frechette 2024 New Investigator Award (1st place)

生体歯科補綴学分野大学院生 Quang Van Guyen

In March 2024, I had an opportunity to present my research results at the 102nd General Session & Exhibition of the International Association of Dental Research (IADR), held in New Orleans, LA, USA. My presentation titled “Enhancing Bone Regeneration by Controlling Oxidative Stress: An *In Vivo* Study” was awarded 1st place of the Arthur Frechette 2024 New Investigator Award.

Following the procedure of cell-based bone augmentation, local oxidative stress occurs at the surgery site due to overproduction of reactive oxygen species that causes transplanted cells to undergo cell death and dysfunction, ultimately hindering bone regeneration. Our study focused on the approach to support bone regeneration by reducing oxidative stress using an anti-

oxidant called Edaravone (EDA).

We found that controlling local oxidative stress at the transplantation site by local administration of EDA improved the local microenvironment, increased the survival and differentiation of transplanted cells, ultimately promoting bone formation. This study is an initial step of developing a predictable bone augmentation method using EDA.

I would like to express my deepest gratitude to my supervisors, Professor Uoshima Katsumi and Dr. Akiba Yosuke, for their invaluable guidance and kind support. Special thanks go to all the faculty members, graduate students of the Division of Bio-Prosthodontics and my friends for their assistance and helpful suggestions during my presentation preparation.



The author is the fifth person from the left side.

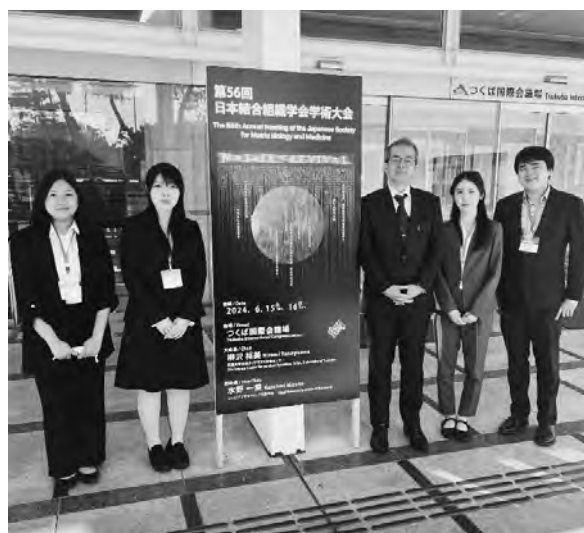
第23回日本再生医療学会総会 優秀演題賞 第5回日本結合組織学会若手セミナー 優秀発表賞 学会受賞報告

生体歯科補綴学分野 小野喜樹

この度、第23回日本再生医療学会総会にて優秀演題賞、第5回日本結合組織学会若手セミナーにて優秀発表賞を受賞致しましたので御報告申し上げます。

私は、日本再生医療学会総会では、「Wnt/ β -cateninシグナルの抑制によるセメント質過形成の制御」、日本結合組織学会若手セミナーでは「Wnt/ β -cateninシグナルは歯周組織再生過程におけるセメント質の添加を制御する」という演題で発表をさせて頂きました。歯周組織は口腔機能において重要な役割を担っていますが、未だ予知性の高い再生方法は確立されていません。そこで本研究では、歯周組織の再生に寄与するシグナルの同定を試みるため、マウスの腎被膜下に臼歯を移植して異所性に再生させた歯周組織をモデルとして各種解析を行った結果、Wnt/ β -cateninシグナルがセメント質の添加を制御していることを明らかにしました。

最後に、本研究の遂行にあたり御指導賜りました魚島勝美名誉教授、加来賢准教授、研究にご協力いただきました研究グループの先生方に心より厚く御礼申し上げます。



結合組織学会にて（筆者は一番右）

第23回日本再生医療学会総会 優秀演題賞受賞

生体歯科補綴学分野大学院生 小林 水 輝

この度、令和6年3月に開催されました第23回日本再生医療学会総会において、優秀演題賞を受賞させて頂きましたので、ご報告いたします。

受賞演題名は『脱細胞化培養歯根膜細胞マトリックスが歯根膜細胞の遺伝子発現に及ぼす影響の網羅的解析』です。三次元構造の保存された細胞外マトリックスである脱細胞化組織は組織再生に有効と考えられており、歯周組織再生においては脱細胞化歯根膜細胞マトリックスが有効と考えられますが、その詳細な組成や機能については未だ明らかになっていません。

本研究では、脱細胞化歯根膜細胞マトリックスはコラーゲンを主成分とし、歯根膜組織に近似したタンパク組成を有することが明らかとなりまし

た。また脱細胞化歯根膜細胞マトリックス上での歯根膜細胞培養は、歯根膜細胞における細胞外マトリックスの代謝関連遺伝子を活性化し、その制御機構としてTGF- β シグナルが関与している可能性が示唆されました。今後は脱細胞化歯根膜細胞マトリックスにおいて、歯根膜細胞の分化誘導に中心的役割を担うタンパクを特定し、歯周組織再生法の開発に尽力したいと考えています。

最後になりましたが、今回の受賞にあたり、ご指導いただきました魚島勝美教授、加来賢准教授をはじめ、本研究にご協力いただきました多くの先生方にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

The 15th International Conference of the Asian Academy of Preventive Dentistry, Best Country-Research Award 受賞報告

口腔生命福祉学講座 研究員 小川 友里奈

この度、The 15th International Conference of the Asian Academy of Preventive Dentistry（香港）においてポスターを用いた口頭発表を行い「Best Country-Research Award」を受賞致しました。演題は「Oral Hygiene Intervention Using Picture Cards to Strengthen Executive Function of People with Intellectual Disabilities」で、福祉施設通所知的障害者を対象として実行機能を補う視覚支援媒体を用いた歯磨き指導の介入研究を行いました。本研究成果は国際雑誌に投稿予定です。今後も知的障害者に向けた口腔保健支援プログラムの確立に取り組んでまいります。本研究の遂行に際し、ご指導賜りました大内章嗣先生、濃野要先生、ステガロユロクサーナ先生、柴田佐都

子先生、松本明日香先生、東京学芸大学の池田吉史先生ならびに研究協力者の皆様に心より感謝申し上げます。

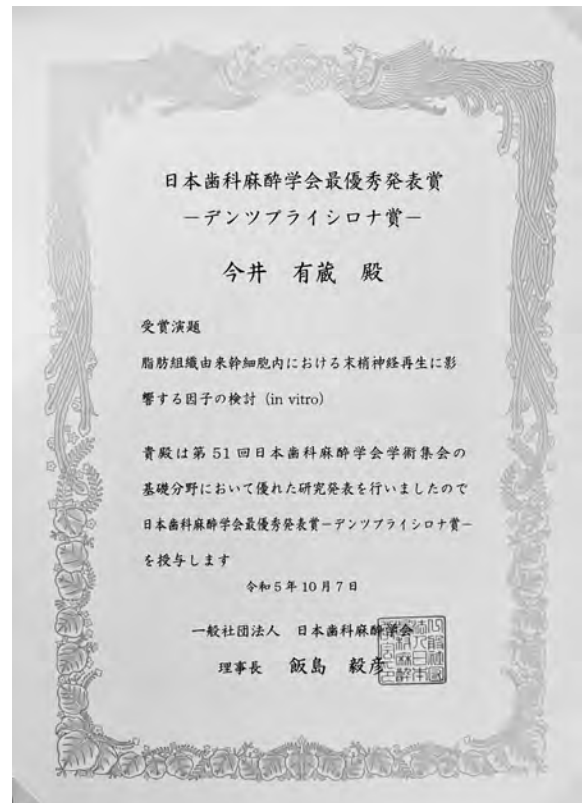


学会賞受賞報告

歯科麻醉科 今井有蔵

第51回日本歯科麻醉学会総会・学術大会（2023年10月6日-8日）において、「脂肪組織由来幹細胞内における末梢神経再生に影響する因子の検討 (in vitro)」という演題で、デンツプライシロナ賞（日本歯科麻醉学会最優秀発表賞）を受賞しましたので、ご報告いたします。

我々は、脂肪組織由来幹細胞（Adipose-derived Stem Cells：ADSCs）から細胞抽出物（CE：Cell Extract）を作製し、末梢神経再生に対するCEの有用性を研究してまいりました。今回、その研究成果でこのような賞を受賞できたことを、とても嬉しく思います。受賞にあたり、指導教官として終始多大なご指導・ご意見をくださいました歯科麻醉学分野 瀬尾憲司教授、岸本直隆先生、ならびに愛知医科大学学生化学教室 武内恒成教授、東京都医学総合研究所所長 三五一典先生、口腔病理学分野 田沼順一教授、山崎学先生、また歯科麻醉学分野の先生方に、この場をお借りして感謝申し上げます。



受賞の際にいただいた表彰状

第51回日本歯科麻酔学会 デンツプライシロナ賞受賞報告

歯科麻酔学分野 氏 田 倫 章

この度、2023年11月6日～8日に長崎県で開催されました第51回日本歯科麻酔学会学術集会において、「膜電位感受性色素を用いた光学的イメージングによる刺激応答の解析」という演題で口頭発表させて頂き、デンツプライシロナ賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。

顎顔面領域の感覚異常のメカニズムとして、近年では三叉神経節内に存在するニューロンやサテライトグリア細胞の活動の異常に注目が集まっています。そこで本研究は三叉神経節と下顎神経がつながった状態を維持したスライス標本を作製し、下顎神経の電気刺激により誘発した三叉神経節内の細胞興奮を空間的・経時的に解析することを目的としました。高速イメージングカメラにより、三叉神経節内の細胞の興奮活動を分析し、C線維を介した光学的反応が観測されたという結論に至りました。今後も三叉神経に関わる感覚変調機構の解明を目指し、臨床と基礎研究の両方に携われるように邁進して参ります。

最後になりましたが、ご指導いただきました瀬尾憲司教授をはじめとする歯科麻酔学分野の先生方、研究のサポートや実験の見学をさせていただきました麻酔学分野の馬場洋教授に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。



表彰式にて 飯島毅彦先生（日本歯科麻酔学会前理事長）と筆者（右）

第19回日本歯科麻醉学会歯科麻醉専門医試験 阿波藍賞受賞報告

新潟大学医歯学総合病院 医療連携口腔管理治療部 金丸 博子

この度、歯科麻醉学会専門医試験にて阿波藍賞を受賞いたしました。この賞は専門医試験の最優秀成績者に贈られるものです。賞の類とは無縁だと思っていたため、非常に驚きましたが「一つ一つの症例を大切にしてください」という瀬尾憲司教授の言葉の基、患者さんから学んだことを積み重ねてきた結果とっております。この度の受賞は仕事と育児の両立という自身の大きな課題に対する一つの成果とも捉えることができ、大変嬉しく感じております。瀬尾教授のご理解はもちろんのこと、ここまで色々な形でお力添えくださいました多くの先生方に深謝申し上げます。

私は2022年の秋に歯科麻醉科から現在の医療連携口腔管理治療部へと所属を移し、手術室での麻醉業務を兼任しながら、口腔ケアを中心とした外来業務を行っております。当治療部は全身状態の不安定な患者さんが受診される部署であり、検査データから病態を想像する機会も多く、歯科麻醉

科で培った経験は非常に有益であると感じております。大学病院は研修歯科医や歯科衛生士の教育の場でもあり、自身の経験がより安全な歯科医療の提供につながるよう今後も尽力してまいりたいと思います。



授賞式にて 筆者は右から2番目

日本歯周病学会学術賞受賞報告

歯周診断・再建学分野 高橋直紀

この度、2023年度日本歯周病学会学術賞を受賞いたしました。日本歯周病学会は会員総数が12,598名（2024年3月現在）を数え、歯科では規模の大きな学会のひとつです。本賞は歯周病学において継続して優れた業績を上げた研究者の功績を讃えることを目的とした賞です。

受賞研究課題は「歯肉上皮バリア機能制御を基軸とした新規抗歯周病薬開発の基盤的研究」です。外界とのインターフェイスである歯肉上皮は、物理的・免疫学的バリアとして生体防御の最前線で重要な役割を果たします。無菌化できない口腔において、その上皮バリア機能の維持・強化

が歯周炎予防および進行抑制において実効性が高いと考え、大学院時代から取り組んできました。近年では、京都大学農学部や新潟大学工学部との共同研究において、機能性脂肪酸や食品由来ペプチドによる上皮バリア制御能を報告し、臨床応用を目指して本プロジェクトを発展させていきたいと思っています。

本プロジェクトの遂行にあたり、大学院時代からご指導賜りました多部田康一教授をはじめ、協力頂きました全ての先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。



受賞式にて（筆者は右から2番目）

第160回日本歯科保存学会春季学術大会 年間優秀論文賞受賞報告

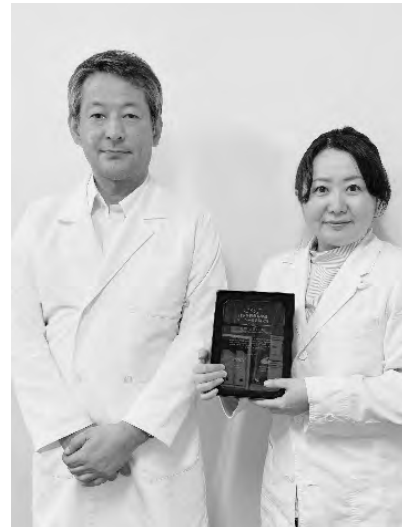
歯周診断・再建学分野 野 中 由香莉

この度、第160回日本歯科保存学会春季学術大会にて2023年度の年間優秀論文賞（歯周病学分野）を受賞いたしましたのでご報告いたします。受賞論文は「Five-year Prognosis and Risk Factor Analysis of Open Flap Debridement for Older People」（ODEP 3巻1号、2023年）です。

高齢者の残存歯数の増加とともに歯周病有病率も増加しています。しかしながら、高齢者における歯科治療のニーズ、そしてゴールは個人差が大きく非常に多様です。本論文では、高齢者に対する歯肉剥離搔把術の有効性とリスク因子について検討しました。その結果、基礎疾患やコンプライアンスなどに問題がない場合には、年齢に関係なく歯肉剥離搔把術による一定の治療効果が得られることが示されました。治療を成功に導く適切な条件および長期の予後については、より詳細かつ大規模な調査による検討が必要ですが、今後さらにエビデンスを蓄積し、患者様により良い医療が

還元できるよう精進して参ります。

最後に、本研究の遂行にあたり、ご指導を賜りました多部田康一教授をはじめ、ご協力いただきました全ての先生方にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。



左：多部田教授 右：筆者

United Japanese Researchers Around the World (UJA) 論文賞奨励賞 受賞報告

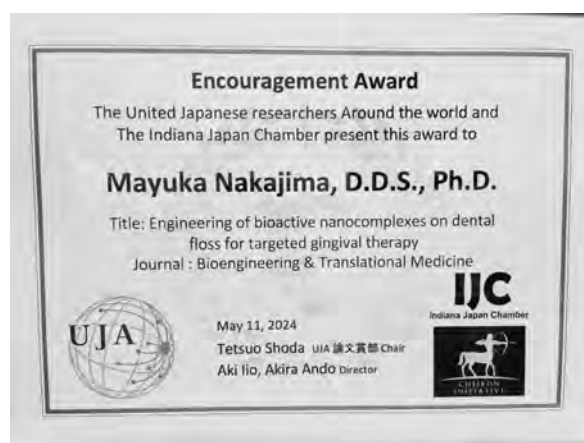
歯周診断・再建学分野 中 島 麻由佳

この度、UJA論文賞奨励賞を受賞致しましたのでご報告いたします。UJAは海外の日本人研究者を繋ぐグローバルプラットフォームで、日本学術振興会ワシントンオフィスなどと連携して日本人研究者のキャリア支援を行っています。論文賞は若手研究者支援として、優れた研究論文を発表した個人を表彰するものです。今回は留学中に手掛けた「Engineering of bioactive nanocomplexes on dental floss for targeted gingival therapy. (Bioengineering & Translational Medicine.)」に対する受賞となりました。

近年、デンタルフロスのブランク除去や歯周病パラメーター改善におけるエビデンスが極めて低いことが報告されました。報告した「Nanofloss」は、Metal-Phenolic Network (MPN) という新素材を応用してフロス糸表面性状の改質を行い、歯周ポケットへの抗菌剤輸送とポケット内への薬剤の長期滞留を可能としたものです。フロスへの薬剤添加はシンプルな発想ではありますが、MPNの技術革新により達成できました。従来の

フロスと比較して清掃効果が大きく改善されることが証明され、今後プロダクトとしての完成が期待されます。

末筆ではございますが、本研究の遂行にあたり御指導賜りましたハーバード大学のSamir Mitragotri教授、留学に際してサポートをいただきました本分野の多部田康一教授に心より感謝申し上げます。



表彰状

学会賞受賞報告

歯周診断・再建学分野 滝澤 史雄

この度、国際学術誌PLOS ONEに投稿した論文が、第1回ファインバブル産業会 学生奨励賞を受賞しましたので、ご報告いたします。本賞は、ファインバブルに関する研究に従事する大学院、学部、高等専門学校に在籍の学生を対象とし、その研究業績に対して贈られるものです。

受賞論文では、ウルトラファインバブル化したオゾンを含む水『オゾンナノ水』の殺菌作用を解析しました。オゾン濃度約1 ppm以上のオゾンナノ水は肺炎球菌（薬剤耐性株を含む）、緑膿菌、う蝕原性細菌、歯周病原細菌を30秒以内に死滅させ、ヒト歯肉上皮細胞に細胞毒性を示さないことを明らかにしました。今後は、オゾンナノ水を医療現場や介護福祉施設、食品衛生分野で消毒液として応用することを目標に研究を続けていきたいと思っております。

最後に本研究にご協力いただきました本学工学

部の先生方、実験および論文執筆においてご指導いただきました寺尾豊教授、土門久哲先生をはじめ、微生物感染症学分野の先生方に感謝申し上げます。



授賞式にて 筆者：右から2番目

学会受賞報告 第16回日本総合歯科学会優秀口演賞

歯科総合診療科 野村 みずき

この度、第16回日本総合歯科学会学術大会において、優秀口演賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。演題名は「器械結びにおける術者視点動画の教育効果に関する検討」です。本研究では、術者視点と介助者視点から撮影した器械結びの縫合処置の動画について、本学研修歯科医の先生方にご協力いただき視聴前後の手技を縫合手技シミュレータ（京都科学）を用いて評価しました。どちらの動画も皮膚の変形量を適正な範囲に近づける効果があり、術者視点の動画には適切な縫合位置をイメージできるようにする効果や運針方法を学習する効果があったと考えられ、術者視点・介助者視点の動画にはそれぞれ異なる教育効果を期待できることが示唆される結果が得られました。最後になりますが、ご指導いただきました藤井規孝教授をはじめとする歯科総合診療科の先生方、ならびにご協力いただいたすべての先生方に心から厚く御礼申し上げます。



左：藤井教授 右：筆者

第53回公益社団法人日本口腔インプラント学会学術大会 優秀ポスター発表賞 受賞報告

生体歯科補綴学分野 小 出 耀

この度、第53回公益社団法人日本口腔インプラント学会学術大会にて優秀ポスター賞を受賞いたしましたのでご報告いたします。

インプラント合併症の一つに「アバットメントスクリューの緩み・破損」があり、締結トルクの影響が考えられていますが、企業推奨トルク値に十分な材料学的根拠が示されていないことが現状です。本研究では、3種類の異なるインプラント／アバットメント結合様式を対象とし、異なる締結トルクでの締結と除去の繰り返し、スクリュー形態および除去トルクに与える影響を調査しました。その結果、30Ncm以上の締結トルクではインターナル及びコニカル結合においてスクリューの破損が生じる可能性が高く、また繰り返し締結により除去トルクが減少していく傾向が明らかとなりました。

本研究の遂行にあたりご指導賜りました生体歯科補綴学分野 前教授の魚島勝美先生、同分野 長澤麻沙子先生、ご協力を賜りました諸先生方に心より感謝申し上げます。



研究指導を賜った魚島教授、長澤先生と共に撮影
筆者中央

学会受賞報告

演題名：ステロイド療法中に象牙質知覚過敏様疼痛 が出現した20例についての臨床的検討

医療連携口腔管理治療部 黒川 亮

ステロイド療法中に生じる象牙質知覚過敏症様疼痛（Dentin hypersensitivity-like tooth pain：DLP）を経験することがありますが、その詳細は不明です。本演題は医療連携口腔管理治療部（当治療部）に口腔管理依頼のあったステロイド療法患者の内、DLPを呈した症例についての詳細を後ろ向きに調査したものです。

結果として、DLPはパルス療法（高容量ステロイド）より開始した症例に多く発症しており、ステロイド療法開始後、早期の段階で初発症状が多く認められたことから、歯科介入の初期段階からDLPの発現を念頭に置いた対応が必要と考えられました。しかし、患歯には器質的異常所見が認められないことが多く、知覚過敏処置などの対応も無効であることがほとんどで、発症後の対応に苦慮している現状も再確認されました。

ステロイド療法が適応となる疾患は多く存在していることから、DLPに遭遇したことがある、または、その対処に苦慮されている先生方は多いのではないのでしょうか。本演題は、これらの問題の提起や共有を目的に発表した経緯があります。本件に関する知識の教示や共同研究などをご検討して下さる先生がいらっしゃいましたら、是非お声がけください。よろしく願いいたします。

最後に受賞にあたり、当治療部・小林正治部長

（当時）、金丸博子副部長をはじめ、ご指導・ご意見をくださいました先生方、調査開始のきっかけを作ってくださった、石山茉佑佳歯科衛生士にこの場をお借りして感謝申し上げます。有難うございました。



研究統括機構研究准教授の名称付与報告

口腔生化学分野 市 木 貴 子

令和5年度に、新潟大学研究統括機構より研究准教授の名称を拝受いたしました。本制度は、研究統括機構において、研究の活性化および発展に寄与することを目的に、大型の科研費等の競争的研究費を獲得し、かつ、優れた研究業績を有する講師または助教に「研究統括機構研究准教授」の名称を付与し、報奨金を支給する制度であり、平成28年度から実施されています。

私はカリフォルニア工科大学留学時に体液恒常性を維持する神経系の制御メカニズムの解明に取り組み、飲水後の飲水抑制機構として、消化管における低浸透圧感知システムを明らかにしました。消化管支配神経の神経活動を一細胞レベルでリアルタイムに観察するために、迷走神経、脊髄神経それぞれの感覚神経節に対する*in vivo*イメージングの実験系を確立しました。今後はさらなる内臓感覚感知メカニズムの解明に取り組みたいと考えており、令和5年度の科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業（JST）さきがけ 生体多感覚システム領域に、課題名「革新的イメージング技術による脳腸関連メカニズムの解明」とし

て採択いただきました。本研究では、独自に確立したイメージング技術により包括的・網羅的な内臓感覚の観察を可能にし、消化管への病態生理的刺激が情動行動に影響を与える神経基盤を明らかにすることで、脳腸関連メカニズムの解明を目指します。

この度の名称付与にあたり、口腔生化学分野照沼美穂教授をはじめ、お力添えいただいた全ての先生方に厚く御礼申し上げます。



令和5年度授賞式（筆者は中央）

歯周病原細菌 *Porphyromonas gingivalis* が炎症性腸疾患におよぼす影響とメカニズムの解析

歯周診断・再建学分野 都野隆博

研究の背景

歯周炎は歯槽骨・顎骨の吸収を介して歯の動揺・脱落を引き起こし、様々な口腔機能障害およびQOL低下を生じますが、歯周炎による影響は口腔内だけにとどまらず、全身性にも悪影響をおよぼします。そのメカニズムとして、歯周炎局所の細菌や炎症性メディエーターが血液循環に流入すること、嚥下された口腔細菌が腸内細菌叢の変動を介して腸管免疫誘導を引き起こすことが報告されています。しかしながら、嚥下された歯周病原細菌が腸管局所の疾患に対して直接的にどのように影響をおよぼすのかは不明でした。そこで我々は腸管局所に炎症を生じる炎症性腸疾患の動物モデルを作製し、嚥下された歯周病原細菌 *Porphyromonas gingivalis* (*P. gingivalis*)

が腸炎進行におよぼす影響とそのメカニズムを解析しました。

研究成果

薬物誘導性に惹起した炎症性腸疾患モデルマウスにおいて代表的な歯周病原細菌の一つである *P. gingivalis* を経口投与したところ、腸管組織における炎症性サイトカイン産生の増加および腸管上皮構造の顕著な破壊が確認されました。このような腸炎増悪のメカニズムとして、*P. gingivalis* の産生するタンパク分解酵素gingipainが腸管上皮細胞間のタイトジャンクション構成タンパクであるZO-1の発現を低下させることで、腸管上皮バリア機能の低下を引き起こし、腸炎増悪を惹起することが初めて示唆されました。

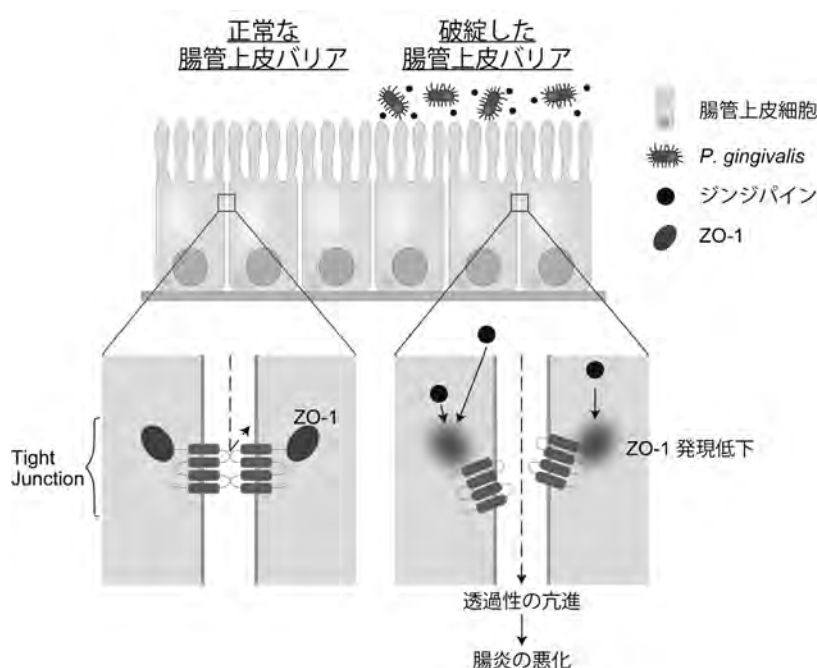


図1 歯周病原細菌 *P. gingivalis* による腸炎増悪のメカニズム

今後の展開

難病指定である炎症性腸疾患には確立された治療法がない一方、過去の報告に細菌因子による影響も示唆されていることから、本研究成果が治療法確立の基盤的研究となることが期待されます。

おわりに

本研究遂行にあたりご指導賜りました高橋先生、多部田先生、山崎先生そして歯周診断・再建学分野の先生方にこの場をお借りして感謝申し上げます。

本研究成果は新潟大学ホームページにて高被引用論文として紹介・掲載されました。

紹介論文情報

タイトル：

Ingestion of *Porphyromonas gingivalis* exacerbates colitis via intestinal epithelial barrier disruption in mice

著者：

Tsuzuno T, Takahashi N, Yamada-Hara M, Yokoji-Takeuchi M, Sulijaya B, Aoki-Nonaka Y, Matsugishi A, Katakura K, Tabeta K, Yamazaki K

掲載誌：

J Periodontal Res.
doi: 10.1111/jre.12816.



新潟歯学会報告

令和6年度 第57回新潟歯学会総会報告

令和6年度新潟歯学会集会幹事
予防歯科
竹原祥子

令和6年度 第57回新潟歯学会総会は4月13日(土)に開催されました。昨年度は新型コロナウイルス感染症対策のためにオンラインと現地参加のハイブリッド開催でしたが、今回は歯学部講堂を会場とする現地開催のみとし、学内外より合計127名の会員の先生方をお迎えすることができました。

総会では、井上誠会頭のご挨拶の後、会務報告、昨年度の会計決算報告・会計監査報告がなされ、今年度の事業計画案と予算案が承認されました。また、魚島勝美生体歯科補綴学前教授、小林正治組織再建口腔外科学前教授、齋藤功歯科矯正学前教授、吉羽邦彦口腔保健学前教授の4名の先生方が名誉会員として承認されました。2023年度の新潟歯学会賞は笹川花梨先生(歯周診断・再建学)、新潟歯学会奨励賞は沢田詠見先生(歯科麻酔学分野)に授与されました。おめでとうございます。

総会議事に続き、午前10時50分から11題の一般口演が行われ、活発な討議がなされました。

午後1時からは福井大学医学部感染症学講座教授 酒巻一平先生による「新薬剤耐性(AMR)対策アクションプランと抗菌薬適正使用」と題する特別講演が行われました。公衆衛生上の重要課題である薬剤耐性対策(AMR)に関する最新動向などについての大変貴重な講演でした。

座長をお引き受けくださった先生方、演者およびご参加いただいた会員の先生方のご協力により、第57回新潟歯学会総会を盛会のうちに終えることができました。この場を借りて御礼申し上げます。

令和6年度第1回例会は7月13日(土)に開催

予定です。詳細は新潟歯学会ホームページをご覧ください(<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/nds/index-j.html>)。



写真1 新潟歯学会賞授与 笹川花梨先生(左)と井上誠会頭



写真2 新潟歯学会奨励賞授与 沢田詠見先生(左)と竹中彰治准講会幹事



写真3 特別講演 酒巻一平先生



同窓会だより

同窓会だより

広報名簿部 部長 加藤 幸生
(歯学科29期)

2024年度の同窓会活動がスタートし、各種行事が順調に進行しています。対面での活動に加え、オンラインを活用することで、近隣の会員のみならず、遠方の会員にとっても身近に感じていただける同窓会を目指し、さらなる発展を遂げたいと考えております。

それでは、活動報告です。

●同窓会総会・学術講演会・交流会

2024年4月21日(日)、歯学部講堂とオンラインのハイブリッド形式で同窓会総会が開催されました。総会に先立ち、学術講演会が行われ、口腔生化学分野の照沼美穂教授が「神経科学や口腔-多臓器連関研究のおもしろさ」と題して講演をしてくださいました。その後、新潟県支部総会と本部の総会が開かれ、各部からの報告と協議が行われ、すべての議案が承認されました。

総会終了後、西堀のイタリア料理店に会場を移し、照沼教授をはじめ多くの会員が参加して同窓会交流会が開催されました。交流会では、長年会

務に尽力してくださった退任役員へのサプライズとして歌のプレゼントもあり、会員間の親睦を一層深めることができました。



照沼教授、ZOOM参加者と記念撮影



会員交流会の様子



講演中の照沼美穂教授

●退職された4名の教授へのお祝い

3月末で定年退職された、小林正治教授(組織再建口腔外科学分野) 吉羽邦彦教授(口腔生命福祉学科 口腔保健学分野) 齋藤功教授(歯科矯正学分野) 魚島勝美教授(生体歯科補綴学分野)、に同窓会よりお祝いを贈呈いたしました。



 長きにわたりご指導いただき誠にありがとうございました。心より感謝申し上げます。
 いました。4名の先生方の多大なるご貢献に対し



左) 小林正治教授 右) 鈴木副会長



左) 吉羽邦彦教授 右) 有松会長



左) 有松会長 右) 齋藤功教授



魚島勝美教授

●新任教授へのお祝い

3名の同窓生が新たに教授に就任され、同窓会よりお祝いを贈呈いたしました。

吉羽永子先生（歯学科19期生） 新潟大学歯学部口腔生命福祉学科口腔保健学講座

高岡一樹先生（歯学科25期生） 滋賀医科大学医学部歯科口腔外科学講座

小松康高先生（歯学科31期生） 明倫短期大学歯科衛生士学科

この度の教授ご就任、誠にありがとうございます。3名の先生方の今後のさらなるご活躍とご健勝を心よりお祈り申し上げます。



吉羽永子教授



左) 高岡一樹教授 右) 佐藤(松山) 副会長



左) 小松康高教授 右) 有松会長

●ネームプレート設置

2024年3月に歯学科54期生35名、口腔生命福祉学科17期生25名のネームプレートを歯学部4階渡り廊下に設置しました。歯学部を訪れる際にはぜひ

ひ4階渡り廊下に足をお運びください。同窓生同士の繋がりを再確認する良い機会になることでしよう。



●能登半島地震における支援活動

この度の能登半島地震で被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

同窓会では、会員の被災状況の確認やお見舞金の支給に加え、過去に災害を経験された先生方からのアドバイスを共有するなど、少しでも被災された同窓の先生方のお力になれるよう、支援活動を行っております。

私事ですが、今年度より同窓会広報名簿部長に就任いたしました。微力ではございますが、同窓会活動に貢献できるよう努めてまいります。

卒業してから25年になります。今は新潟市内で開業しておりますが、卒業間もない頃は、歯科医師として一人前にやっていけるのだろうかという不安ばかりが先立ち焦っていたことを思い出します。現在、同窓会員は3,000名を超え、国内外で広く活躍されています。若い先生方（若い先生ばかりでなくそれぞれの年代で）の不安に対して、同窓生はきっと役立つアドバイスをしてくれることでしょう。ぜひ同窓会を通じて先輩方や仲間との交流を深めていただければと思います。皆様の積極的な参加をお待ちしております。



教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
任期満了	R 5 . 12 . 31	LAY THANT		高度口腔機能教育研究センター特任助教
採用	R 6 . 2 . 1	星 野 剛 志	予防歯科学分野助教	医歯学総合病院医員
採用	R 6 . 2 . 1	市 川 佳 弥	歯科矯正学分野助教	医歯学総合病院医員
定年退職	R 6 . 3 . 31	魚 島 勝 美		生体歯科補綴学分野教授
定年退職	R 6 . 3 . 31	齋 藤 功		歯科矯正学分野教授
定年退職	R 6 . 3 . 31	小 林 正 治		組織再建口腔外科学分野教授
定年退職	R 6 . 3 . 31	吉 羽 邦 彦		口腔保健学分野教授
退職	R 6 . 3 . 31	北 見 公 平		歯科矯正学分野助教
退職	R 6 . 3 . 31	那小屋 公 太		摂食嚥下リハビリテーション学分野助教
任期満了	R 6 . 3 . 31	池 田 順 行		顎顔面口腔外科学分野助教
任期満了	R 6 . 3 . 31	落 合 勇 人		摂食嚥下リハビリテーション学分野特任助教
任期満了	R 6 . 3 . 31	北 見 恩 美		歯科薬理学分野特任助教
任期満了	R 6 . 3 . 31	山 田 真 子		摂食嚥下リハビリテーション学分野特任助手
昇任	R 6 . 4 . 1	吉 羽 永 子	口腔保健学分野教授	医歯学総合病院講師
採用	R 6 . 4 . 1	笹 杏 奈	摂食嚥下リハビリテーション学分野助教	
採用	R 6 . 4 . 1	沢 田 詠 見	歯科麻酔学分野特任助教	医歯学総合病院医員
採用	R 6 . 4 . 1	土 橋 梓	生体歯科補綴学分野特任助教	医歯学総合病院医員
採用	R 6 . 4 . 1	菊 池 裕 子	摂食嚥下リハビリテーション学分野特任助教	
採用	R 6 . 4 . 1	岸 本 奈 月	包括歯科補綴学分野特任助手	医歯学総合病院レジデント
退職	R 6 . 5 . 31	日 吉 巧		高度口腔機能教育研究センター助教

【事務等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
退職	R6.2.9	常木 雅之		硬組織形態学分野技術補佐員
退職	R6.2.29	高橋 泰子		組織再建口腔外科学分野事務補佐員
退職	R6.2.29	高橋 泰子		予防歯科学分野事務補佐員
採用	R6.2.26	白柏 智恵子	歯周診断・再建学分野技術補佐員	
採用	R6.3.1	小川 綾香	組織再建口腔外科学分野事務補佐員	
採用	R6.3.1	山野井 澄江	予防歯科学分野事務補佐員	
昇任	R6.3.31	池田 恵美	総務部人事企画課(文部科学省実務研修生出向)	医歯学系歯学部事務室学務係
異動	R6.3.31	鈴木 香織	研究企画推進部社会連携課	医歯学系歯学部事務室総務係
任期満了	R6.3.17	梨本 絵美		歯周診断・再建学分野技術補佐員
任期満了	R6.3.31	大野 真琳		医歯学系歯学部事務室総務係事務補佐員
異動	R6.4.1	坂上 亮	医歯学系歯学部事務室学務係	人文社会科学系学務課
採用	R6.4.1	松川 大我	医歯学系歯学部事務室学務係	
採用	R6.4.3	鈴木 友里絵	医歯学系歯学部事務室総務係派遣職員	

病 院

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	R6.1.1	宮澤 春菜	臨床研究推進センター特任講師	
任期満了	R6.3.31	都野 隆博	高度医療開発センター特任助教	
任期満了	R6.3.31	小松 康高	歯周病科助教	
採用	R6.4.1	小林 亮太	顎顔面口腔外科助教	
育児休業	R6.4.17	兒玉 匠平	義歯診療科助教	
育児休業復帰	R6.5.18	兒玉 匠平	義歯診療科助教	

【看護・医療技術部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
所属換	R6.3.11	岡田紀子	東3階病棟副看護師長	東7階病棟副看護師長
所属換	R6.3.11	渡邊雅史	東7階病棟副看護師長	東3階病棟副看護師長
退職	R6.3.31	川村都子		東3階病棟看護師長
退職	R6.3.31	樋浦美樹		外来（歯科）看護師
退職	R6.3.31	小林貴未		東3階病棟看護師
採用	R6.4.1	小島優	東3階病棟看護師	
採用	R6.4.1	篠原碧那	東3階病棟看護師	
採用	R6.4.1	白川彩実	東3階病棟看護師	
採用	R6.4.1	羽鳥未柚	東3階病棟看護師	
所属換	R6.4.1	深澤恵里	東3階病棟看護師長	看護職キャリア開発コアセンター看護師長
所属換	R6.4.1	五十嵐実花子	外来（歯科）看護師長	医療安全管理部看護師長
所属換	R6.4.1	儀同真由美	患者総合サポートセンター看護師	外来（歯科）看護師長
所属換	R6.4.1	山口雅陽	高次救命災害治療センター4階看護師	東3階病棟看護師
所属換	R6.4.1	原初月	東7階病棟看護師	東3階病棟看護師
育児休業復帰・所属換	R6.4.1	佐々木潤美	東5階病棟看護師	東3階病棟看護師
育児休業復帰・所属換	R6.4.1	鈴木夕夏	西8階病棟看護師	東3階病棟看護師
育児休業復帰・所属換	R6.4.15	齋藤恵美	東3階病棟看護師	東7階病棟看護師
退職	R6.1.31	古川泉		歯科衛生部門歯科衛生士
退職	R6.3.31	中村夢衣		歯科衛生部門歯科衛生士
退職	R6.3.31	石澤尚子		歯科衛生部門歯科衛生士
退職	R6.3.31	石山茉佑佳		患者総合サポートセンター歯科衛生士
任期満了	R6.3.31	齋藤菜月		歯科衛生部門歯科衛生士
任期満了	R6.3.31	駒澤美幸		歯科衛生部門歯科衛生士
任期満了	R6.3.31	倉又七海		歯科衛生部門歯科衛生士
採用	R6.4.1	長谷川葉奈	歯科衛生部門歯科衛生士	
採用	R6.4.1	中村夢衣	歯科衛生部門歯科衛生士	
採用	R6.4.1	邊見真梨奈	歯科衛生部門歯科衛生士	
採用	R6.4.1	駒澤美幸	歯科衛生部門歯科衛生士	
育児休業復帰	R6.4.8	筒井亜香里	歯科衛生部門歯科衛生士	

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	R6.5.31	中村 夢衣	歯科衛生部門歯科衛生士	
採用	R6.6.1	中村 夢衣	歯科衛生部門歯科衛生士	

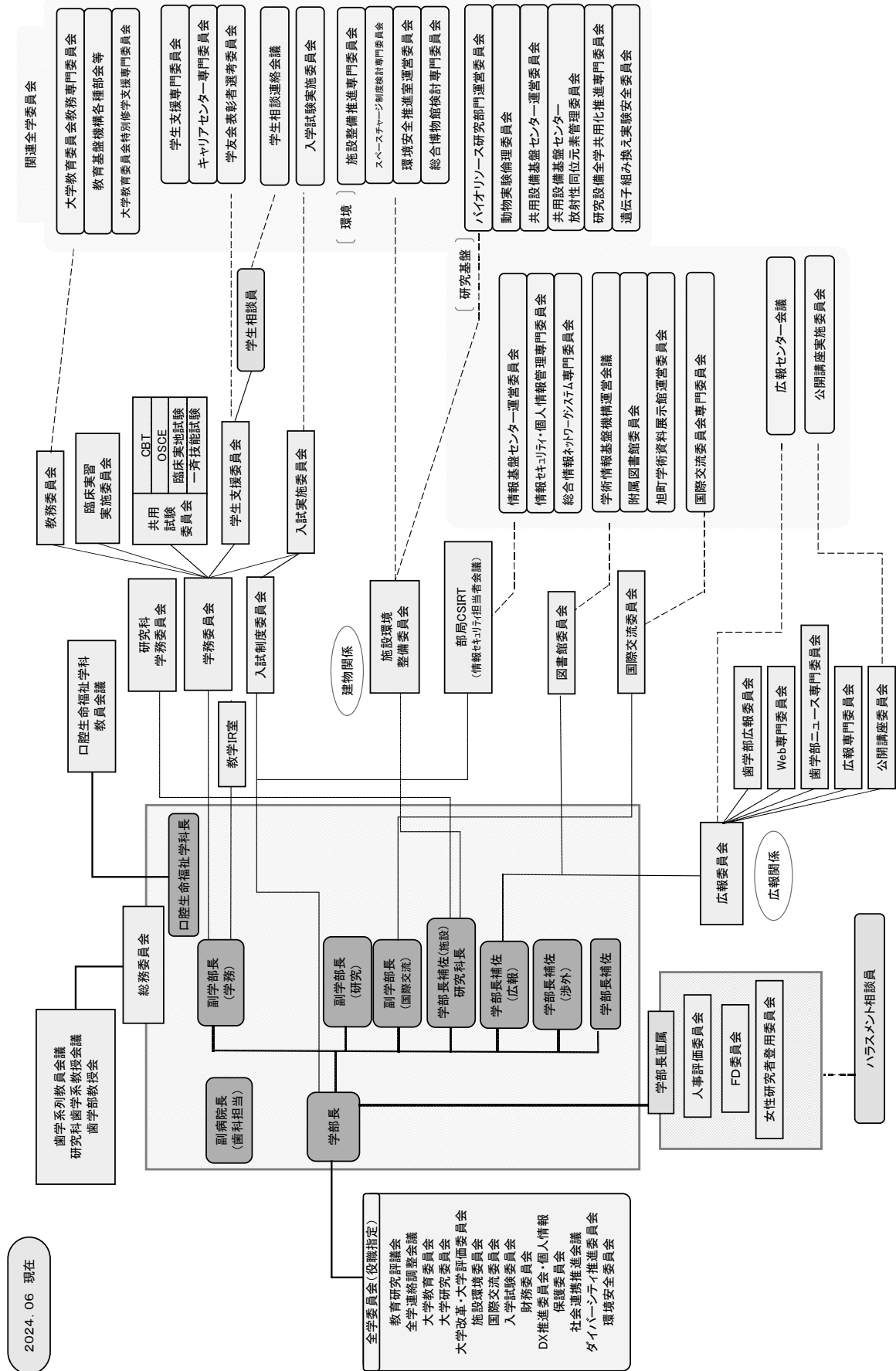
【事務部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	R6.3.31	登松 司		経営企画課副課長
退職	R6.3.31	山本 伸		管理運営課副課長
昇任	R6.4.1	渡辺 浩匡	管理運営課長	自然科学系総務課副課長（佐渡 自然共生科学センター事務室長）
昇任	R6.4.1	目黒 栄光	基礎・臨床研究支援課長	財務部財務企画課副課長
昇任	R6.4.1	媚山 奈保	総務課専門職員	人文社会科学系学務課主任
昇任	R6.4.1	野水 正幹	経営企画課副課長	財務部財務企画課会計法規係長
昇任	R6.4.1	北村 文乃	基礎・臨床研究支援課研究管理係長	基礎・臨床研究支援課主任
昇任	R6.4.1	伊藤 和美	医事課専門員（安全管理）	総務課職員係長
昇任	R6.4.1	渡邊 文子	医事課専門職員（育成）	医事課主任
昇任	R6.4.1	真柄 千恵	医事課審査係長	医事課主任
昇任	R6.4.1	土田 聡美	医事課公費医療係長	医事課主任
配置換	R6.4.1	小黒 健児	総務部総務課長	基礎・臨床研究支援課長
配置換	R6.4.1	石井 薫	学務部入試課長	管理運営課長
配置換	R6.4.1	斎藤 俊夫	経営企画課長（経営分析室長）	長岡技術科学大学学生支援課長
配置換	R6.4.1	松岡 琢磨	医事課長	研究企画推進部社会連携課長
配置換	R6.4.1	長谷川 亨	医療DX推進室長	医事課長
配置換	R6.4.1	小林 晴男	専門幹（病院経営分析担当）	経営企画課長（経営分析室長）
配置換	R6.4.1	服部 正人	総務部労務福利課副課長	医事課専門員（安全管理）
配置換	R6.4.1	稲毛 友壽	労務福利課専門職員（労務企画）	基礎・臨床研究支援課研究管理係長
配置換	R6.4.1	佐藤 聡子	総務部労務福利課福利係長	総務課人事係長
配置換	R6.4.1	中村 克純	財務部財務企画課企画調整係長	管理運営課管理係長
配置換	R6.4.1	河田 光正	学術情報部学術情報管理課専門職員	管理運営課薬品材料係長
配置換	R6.4.1	白田 隆太	総務課副課長（総務） （地域医療推進係長兼務）	総務課副課長（総務）

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
配置換	R6.4.1	矢野目 健	総務課人事係長	総務部人事企画課人事係長
配置換	R6.4.1	佐藤 英 恵	総務課職員係長	総務部人事企画課専門職員(任用企画)
配置換	R6.4.1	佐賀 友 和	総務課専門職員	総務部総務課秘書係長
配置換	R6.4.1	五十嵐 義 和	管理運営課副課長	自然科学系総務課副課長(工学部事務室長)
配置換	R6.4.1	星野 智 裕	管理運営課管理係長	総務部付専門職員
配置換	R6.4.1	青山 由紀代	管理運営課薬品材料係長	管理運営課専門職員(契約企画)
配置換	R6.4.1	田澤 由紀子	医事課副課長(診療)	医事課副課長(診療) (審査係長、公費医療係長兼務)
配置換	R6.4.1	戸松 真 紀	医事課入院係長	医事課専門職員(育成)(入院係長兼務)
配置換	R6.4.1	小嶋 貴 幸	医事課収入係長	総務課専門職員(地域医療推進係長兼務)
配置換	R6.4.1	村山 登	医事課専門職員	医事課収入係長
配置換	R6.4.1	平澤 秀 幸	医療DX推進室医療情報係長	経営企画課医療情報係長



《歯学部各種委員会》



歯学部を支える方々

思うこと

歯学部学務係長 渡部 康雄

令和5年4月から、歯学部学務係長として参りました渡部と申します。新潟大学では、学務系でずっと働かせていただいております。係長としては、法学部→医学部医学科→農学部で勤務しており、主に入試業務を担当しております。長く学生関係の仕事に携わって、当初採用されたばかりの頃は、学生との年齢も近く、心情的に学生側に立ちたりすることもありましたが、どんどん学生との年齢も離れていくにつれ、学生との距離感を感じてしまうこともあり、現実を受け止めなければなりません。周りの若いスタッフのおかげで、なんとかやっています。

学生時代は、勉強以外にも、サークル活動やアルバイトに一生懸命になり、様々な人々との出会いができる黄金の期間？というイメージがありますが、歯学部の学生さんは、勉強もかなり頑張らなければならないので、大変そうだなと思う反

面、授業の合間の休み時間や食事の時間で楽しそうに話しているのを見ると、皆それぞれ学生生活を謳歌しているのだなあと、学務係として少しでも皆様のサポートができればなあと励みになります。特に運動会での学生の様子を見ると、大変楽しそうに、競技に取り組んでいて、見ているだけで楽しくなりました。

サブタイトルに「歯学部を支える方々」とありますが、仕事をしていく上で、困難なことがあった場合も、周りの助けを借りて問題解決に取り組むという意味では、私自身、歯学部を支えられているということを実感しております。今までも、困ったことがあり、相談したときにも、親身になって対応いただき、大変感謝しております。

最後に、学生さんの皆様には、事件・事故等なく無事に卒業できることを願っております。



新しい環境での出会い

歯学部総務係 杉江 あきの

歯学部総務係の杉江と申します。令和5年4月に採用となり、歯学部事務室へ参りました。学生時代は五十嵐キャンパスで過ごしたため、旭町キャンパスの配属となり、はじめは分からない場所・用語が多く戸惑いましたが、先生方や事務室の皆さまのお陰をもちまして、まだまだ半人前ではございますが、少しずつ成長することができております。

現在は、人事関係や広報関係、勤務時間管理等の業務を担当しています。書類の提出やメールでのやりとりなど、先生方にはお手数をおかけすることが多々ありますが、いつも迅速に、丁寧にご返答くださり、大変感謝しております。今年2月には、先生方の海外出張に随行させていただく貴

重な機会をいただき、先生方の教育や研究に対する熱い姿勢を間近で拝見しました。事務としてできることは微力ではありますが、より良いサポートを行い、歯学部のお役に立てるよう一層精進してまいります。

コロナ禍も落ち着いてきた今日この頃は、県外へ旅行に出かけ、おいしいものを食べるのが楽しみのひとつです。近隣の県に行くことが多いですが、いつか全都道府県制覇することをひそかな目標としています。おすすめの観光地やグルメ等があればぜひ教えていただけると嬉しいです。

最後に、至らない点が多く、未熟者ではございますが、今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願いたします。



編集後記

ネットニュースが主流となりつつある昨今、記事の内容よりも膨大な情報の中から自分の知りたいものを選択する作業にばかり労力を割いているように感じる。今回、歯学部ニュースの編集に携わり、原稿を通じて歯学部に関わる方々の「熱量」を実感いたしました。厳選した情報をまとめましたので、ぜひ内容をお楽しみいただければと思います。最後に、歯学部ニュース145号発刊に際しまして、原稿作成にご協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

歯周診断・再建学分野 佐藤 圭祐

今回初めて編集委員を務めました。寺尾先生をはじめ、編集長中村先生、事務の方々のご協力により無事に発刊の運びとなり、とてもうれしく思います。またお忙しいところ原稿執筆いただきました皆様に御礼申し上げます。新潟大学歯学部のアクティブな活動状況を内外に広く発信する本誌事業に携わることができ大変貴重な経験となりました。

歯科麻酔学分野 山本 徹

新潟大学に赴任して歯学部ニュースの存在を知り、歯学部の学生さんや先生方の様子を細かに知ることができる貴重な媒体であると感じておりました。今回初めて編集に携わせていただき、編集責任者の寺尾先生をはじめ、事務の方々を含めた多くの方々のご協力で本誌が作成されていることを知ることができ、大変良い機会となりました。原稿依頼に苦勞した場面もありましたが、お忙しい中、原稿を引き受けてくださった皆様、誠にありがとうございました。

口腔生化学分野 市木 貴子

この度、編集長を務めさせていただきました。本誌が実に多くの人の手によって作られ、そして多くの人の手へ渡る媒体であることを実感する機会となりました。人の手を介して作られ、書き手と読み手がつながっていく、その営みに温かさを感じることができたことも、大きなやりがいとなりました。執筆を快諾していただいた皆さま、伴走していただいた編集委員の皆様、編集作業を土台から支えていただいた寺尾先生、そしてすべての読者の皆様に心より御礼申し上げます。これからも、皆様の心と身体が豊かでありますように…。

福祉学分野 中村 健

歯学部ニュース

令和6年度第1号（通算145号）

発行日	令和6年10月4日
発行者	新潟大学歯学部広報委員会
編集責任者	中村 健、寺尾 豊
編集委員	佐藤 圭祐、山本 徹 市木 貴子
印刷所	(株)ウィザップ

表紙・裏表紙写真の説明

表紙の撮影データ：

撮影地：福島県喜多方市（日中線しだれ桜）

撮影日：2024年4月

使用機材：OM SYSTEM OM-5/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO／焦点距離：12mm・絞り：F4開放・シャッター速度：800分の1秒（絞り優先自動露出／+1/3ステップ補正）・感度：ISO200

裏表紙の撮影データ：

撮影地：上越市（高田城三重櫓）

撮影日：2024年4月

使用機材：OM SYSTEM OM-5/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO／焦点距離：12mm・絞り：F4開放・シャッター速度：60分の1秒（絞り優先自動露出／-1ステップ補正）・感度：ISO6400・手持ち撮影

コメント：今号では桜つながりということで、表紙には、喜多方市の日中線しだれ桜を、裏表紙には上越市の高田城三重櫓を題材としました。桜は数多ある花の中でも飛び抜けて写真にするのが難しいと個人的に感じています。肉眼で感じるような透明感のある花弁の色合いを表現するには、普通に正面から構えて露出（明るさ）をカメラに任せるだけではなかなかうまくいきません。表紙のしだれ桜については、垂れ下がる花の枝を背景が空になるように真下から狙い、太陽を花筵の後方に隠して花弁は透過光ですかし見るような表現にしてみました。ズームレンズ広角端の最接写で絞り開放にして露出をカメラの設定より若干明るく（+1/3ステップ補正）調整しています。裏表紙の高田城では櫓が主役で桜はかろうじてその存在がわかる程度の脇役にさせていただいていますが、ライトアップされた桜の木と灯されたぼんぼりが堀の水面に反射して幻想的な風景になるよう、露出をカメラの設定よりかなり暗く（-1ステップ補正）調整しています。この撮影スポットは観光方面で有名のようで、この写真の撮影時も周りに多くの方々ががっしりとした三脚のついたカメラを構えておられました。

本誌中の写真の使用機材

ボディ：OM SYSTEM OM-5

レンズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO

撮影者：林 孝文



リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。